第２分科・分散会　「平和・組織・教育・人権・文化・組織」（1階　山中ホール　後方102号室）

会場責任者　　池田敬子（日退教副会長）
　　畠山幸子（日退教副会長）
司　　会　　加藤富士雄（組織部会）
　　片山　亨　（組織部会）
記　　録

リポート

① 千葉県退教の現状と取り組んできたこと　（千葉県）

② 2022 年度都高退の活動（東京高）

③ 高退教活動って、何・・・・・？(熊本高)

④ 「はだしのゲン」削除問題から考える(広島県)

⑤ 反戦・平和を訴える平和劇（朗読劇）を子どもたちに（大分退現教）

⑥ 「安倍晋三元首相国葬閣議決定取り消し並びに予算執行差し止め違憲確認及び損害賠償請求事件」横浜訴訟について（神奈川高）

⑥ 400 号間近!!会報発行のとりくみ（福島・報告者なし）

組織活動交流集会参加レポ　　2023.10.12 千退教平野直比古

千葉県退教の現状と取り組んできたこと

１．はじめに

教員退職者の会は、新規に加入者が入ることは難しく、高齢者は次々になくなっていくので、会員の減少に歯止めがかからない。１２年前、私が加入したとき、１３５名だった会員数は、現在６９名となった。そしてこうした状況は、全国に共通している。私たちの会の会員が減少していくということは、現職の組合が攻撃を受け、政治活動などに参加出来なくなっている状況の中では、社会的な影響はとても大きい。

そして、教員のシニアだけに限らず、他の労組のシニアの会にも新会員が加入してこないことで会員の減少に歯止めがかからないということは共通しているようである。

どうしてこうした事態で起きているのか、そして何を考えどのような取り組みをしていけば改善に結びつけていけるのか、考え、取り組んできたことを報告したい。

２．教育労働者の組織離れが労働強化の中で起きている？

教員の労働は、この１０年で更に激務となった。退職したら、もう人とも組織とも関わりたくない、もう自由になりたい。という人が以前にもまして増えている。

この１０年で、道徳が教科になり、評価することになり、小学校で３年生から免許外の教員によって英語教育が始まった。その評価もしなければならない。プログラミング教育も始まった。電子黒板を使いながらの授業も始まった。コロナでオンライン授業もすることを余儀なくされた。やったことのないことをこなしていかなければならないことが大幅に増えた。忙しくて生徒に目が届かなくなってくる。いじめなどが見落とされがちになる。学校では、何かあったら対応できるようにしておかなければならない、ということで様々なことで記録することが求められるようになったという。例えば、２年生まで登校できていた生徒が３年生になり、不登校になったとしたら、保護者から、新しい担任になって指導法が変わり、そこに問題があったのではないか？と追求されてもいいように、記録をとっておかなければならない、というのだ。

運動会の役員決めを色別にしていたとき、その決めている状況を録画していた先生がいるので、何をしているのか聞いてみたら、「ちゃんと公正に役員決めをしたのか」と保護者から追求されたときのために録画しておくんだ、といった教員がいたそうだ。いかに現職教員が追い詰められているが想像できる。。

一昨年前にあったことだが・・・中一の一学期の中間テスト、中学に入って初めての英語のテストで、平均点が５０点くらいだったことがあった。初めての英語のテストですから、易しい問題だし、大体平均が８０～９０点くらいになるのが普通なのだが・・・、どうしてそうなったかというと、英文で答えを書くとき、最後にピリオドを書き忘れた場合、その英文が正解であっても、すべてを×にしたというのだ。担当教師は若い教師だったという。また、テスト直前に、生徒の教科書が教師によって回収されてしまい、生徒がテスト前に勉強できなくなったこともあった。その教師は、通信簿に記入することになっている「関心・意欲・態度」の欄に記入する手がかりを生徒一人一人の教科書に求めていたというのだ。意欲のある生徒は、教科書に大事なところに線が引いてあったり何か記入したりしているだろう、それがあれば意欲のある生徒と教師は判断した、ということだったときいた。

何と常識の無い教師なんだろう、という声が起こりそうだが・・・。

しかし、私も今から思うと冷や汗が出るような失敗も教師に成り立ての頃はあった。でもその頃は先輩教師が良くフォローしてくれた。

これが、私たちの若い頃であれば、先輩が、「それは止めといた方がいいよ、もう少し別の方法をとっといた方がいいよ」といって具体的な実行可能なアドバイスをしてくれて、直前にそうした事態は回避されていたように思う。

きっと、その教師は、まわりから批判されたのではないだろうか。陰でいろいろと言われ、それを薄々気がつき、参っていたりするのかも知れない。教育現場に業績評価も導入されてしまっているし、教員同士が管理されるようになり、職場のぬくもりがなくなってきている。２０２１年度、病気休職者の数は過去最高の８３１４名、心の病で１ヶ月以上休んだ教員は１万人を超えたという。

その様な教員生活を終え、退職者したら、もう教育関係の仕事や団体には首を突っ込みたくない、その様にいう人は多くなっているのは、やむを得ないのかも知れない。

２．現職の組合と退職者の組合の日常的な情報共有を図ることにしたのだが・・・？

退職者組合の議案書の中には、どこでもそうだが、「現退一致で運動に取り組もう！」と、スローガンで謳っている。しかし、それは大体、スローガン倒れになっている場合が多いと思う。現職の仲間がどのようなことで具体的に困っていて、現職の仲間も先輩の退職者達は実際にどんな状況で生きているのかはわからない。これでは、共同行動は出来ない。日頃その様になっているのに、選挙の時だけ一緒にやりましょうといっても、それは無理な話である。だから、日常的に何でもいろいろな話が出来るようになっていなければならないのだと思う。

私は、何かにつけ支部の組合には顔を出し、何回に一回は、ちょっと高いけどレディボーデンのアイスクリームなんかを差し入れしてあげたりして、いろいろな話をしている。

そして今組合員が困っていることなどを聞き、そのつらい気持ちに共感するようにしている。県の役員会は２ヶ月に一回、千葉の教育会館で行われる。館山では中村屋という、おいしいパン屋さんがある。幹事会の度にとは行かないが、一番人気のパンの差し入れをするようにしている。書記さん含めると１３人になる。全員に買っていく。みんなとても喜ぶ。だからというわけではないが、何か頼むと一生懸命、協力してくれる。署名などは私たちも一生懸命に取り組むようにしている。そして、彼らも、こちらのお願いには誠実に答えようとしてくれるようになってきている。

３．具体的な取り組みとして、平和講演会と組合から.現職の退職していく組合員の勧誘が行われるようになった。

私が県の事務局長になり、７年目になったが、県教組、高教組、高退教の４者合同の講演会が年に一度、実施できるようになった。コロナ騒動で２年出来なかったが、今年、沖縄選出の伊波洋一さんを講演会を実施し、４度目となった。講師を誰にするかなど、初めて取り組むときは千教組も何をやるんだろうといった感じで少し、警戒していた様にも思われるが、今ではすべて信頼してくれて、３０名位の動員に常に組んでくれている。「いつも千退教さんの講演会は勉強しなります」と現職の執行委員より耳にしている。

今年の１月には、県の書記長が、初めて、県内の書記長を全員集めて、私を紹介し、退職していく人たちに退職者会について紹介し、勧誘の依頼をするようにしてくれた。実際にそれで加入してきた人はいないが、彼らが、退職者会が存在することはよいことだと考えてくれていることは確かであり、この取り組みを進めていくことはきっと現職の組合にも良い結果をもたらすと思う。現状は厳しいが、一昨年一人、今年、一人と加入者は獲得できている。私たちの組織は存亡の危機にあるのは事実だが、現職の仲間との交流の発展の中に展望が見え隠れしていると考えている。

都高教退職者会の活動について
～２０２２年度の報告～

当会では都高教と共催し「憲法学習会」、「反原発学習会」を開催しました。また退職者会独自で「辺野古座り込みツアー」を行っています。

「戦争法反対・撤回を求める19日集会」をはじめとする、日退教からの様々な取り組み、都退協（都労連退職会）への取り組み参加を行っています。

会員親睦を目的として、囲碁大会、歴史散歩（東京散歩）を行いました。従来は、メーデー参加の後親睦会を開催していましたが、コロナ禍のため４年にわたって中止を余儀なくされています。

別紙　報告

＊憲法学習会（5/27）『今こそ立憲野党がつくる「戦争回避」の戦略』～講師　中野晃一　さん～

＊あれもこれもの沖縄辺野古応援ツアー（3/21～22）

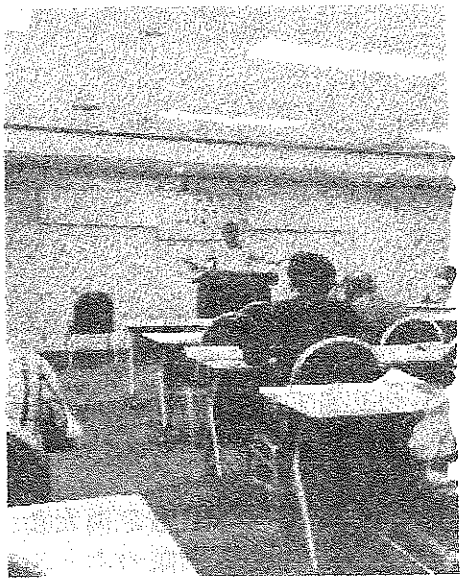
退職者会・都高教共催「憲法学習会」　2023・5・27

今こそ市民と立憲野党がつくる「戦争回避」の戦略

講師　中野晃一さん

自己紹介と私の活動の原点

上智大学国際教養学部教授。1970年東京生まれ。政治学（日本政治、比較政治、政治思想）。東京大学（哲学）および英国オックスフォード大学（哲学・政治学）の両校を卒業、米国プリンストン大学にて政治学の修士号および博士号を取得。
　安保法制の廃止と立憲主義の回復を求める市民連合、安全保障関連法に反対する学者の会、立憲デモクラシーの会などの呼びかけ人。
主著『野党が政権に就くとき-地方分権と民主主義』（人文書院）、『私物化される国家-支配と服従の日本政治』（角川新書）、『右傾化する日本政治』（岩波新書）など。



闘う学者とご紹介いただきましたが、もともとそういうことを好んでいたというわけでもないんです。日本の大学で哲学をやって、もうちょっと職にありつけそうな分野に変えようと思ってイギリスに行って、政治学と哲学をやり、そのあとアメリカに行って政治学をやってというようなことで博士までやりました。たまたま上智で公募があってそこで採用してもらったということになります。

もともと自分自身のアイデンティティとしては左派なんです。もの心ついた時から自民党が嫌いだったですし、自民党政権が倒れた時に大学生だったものですから。そういう政治的な立ち位置はあるのですが、政治を研究する以上は政治の中に入っていちゃうのはやはりまずいことなので、そういうことをするつもりはなかったんです。マスコミなどに請われれば解説をしたり、専門家として言えることは言うというのをやっていましたが。それじゃだめだと思ったのが、安倍政権が2012年12月にできた時なんです。政治学者として日本政治を中心に研究してきた中で、これから大変な時代が来るというのが分かったわけですね。分かった以上は、学者だからといって傍観しているわけにはいかないと思いました。ひとり息子が今15歳になりますが、父親として息子のことを考えた時に、将来、こんなことになったけど父親は政治学者だから客観的に分析していた、みたいな話はできないなと思ったわけです。

あの時、日本の民主主義、政党政治は完全に死んだ

何でひどい時代が来ると思ったかというと、政権の壊れ方と自民党の政権への戻り方なんです。民主党政権が3年3か月あったわけですが、野党だった自民党がさらに右傾化して、それまでだったら一定程度我慢していたところが、歴史修正主義から在特会だとかとの付き合いも含めて。既得権益から見れば政権から外れた自民党に対する興味が減った時に、右派が自民党を熱心に支えて何としても日本を取り戻せ、というので右に引っ張っていったということがありました。

あの時民主党は最終的に内部分裂してしまって。日本記者クラブでやった2012年12月の選挙の党首討論は、確か13政党くらいで、党首討論にならなかったんですね。自民党、公明党、共産党に加えて、割れた民主党の様々なグループがあり、維新ももうできていて国政進出していました。そこで何が起きたかというと、民主党が政権を取った2009年には300くらい議席を取ったのが57まで落ちるというすごい負け方をしたわけです。それでも最大野党ですが、増税と社会保障の一体改革ということで野田さん側に残った人しかいなかった訳です。民主党結党以来一番右に寄っていた。維新もすでに53議席取っていて、民主党との差がわずか4議席、民主党から割れた人たちはことごとく負ける。共産党にしても社民党にしても、議席をさらに減らすということで、政党政治が一切何の歯止めもきかないことにな

りました。案の定、NHKの会長人事だとか、内閣法制局長官の人事だとかに介入していって、結局、特定定秘密保護法だ、安保法制だということで進めていく態勢ができてしまったということだったわけです。

私は、あの時に一度民主主義、政党政治は完全に死んだと思っています。今また非常に厳しい状況ですが、あの時の絶望を忘れて今になって何か終わったかのように思っている方がおかしいわけで、あれ以降ずっと日本の政治は瀕死状態にあるというのが実態だと思います。その中でどうやってまともな野党勢力、つまり憲法の上でそれに則って政治をやろう、人々の生命、暮らし、権利を守るために政治をやろうという勢力を大きくしていって、バランスを回復して、政権交代につなげていくということを目指さなければならない。

多くの人が政治を諦め、野党が割れて何の歯止めもきかなくなった

安倍さんが政権に戻ってきた12年というのは、麻生さんが負けた時の票より少ない票で帰ってきてるんです。その後、安倍さんは14年に消費税増税を先送りする「国難突破解散」とかでたらめなことを言って、14年、17年と3回衆院選挙に勝ち続けて、しかも公明党を足すと三分の二を取り続けています。しかし安倍さんが選挙に強いと言っても、麻生さんが取った票より少ないわけです。小選挙区制のマジックです。野党が分断されていて、1位争いということになった時に共闘もなにもできないから勝負にすらならない。しかもそれまでだったら民主党に一回やらせてみるかという期待があって、一定の浮動票・無党派層を期待できたものが、投票率がご承知の通り2009年の政権交代の時には70%近かったものが、安倍さんが戻って来た時には60%を切って、その後さらに下がって今は50%をわずかに上回っているという状態です。多くの人たちが政治をあきらめていて半分近くの人が棄権して、野党が割れている限り、未来永劫、何度選挙をやったって自民党政権が続くんです。何の歯止めもないから、民意が得られたと言ってどんどんこうしたことが出来ちゃうわけですね。

若い人が保守化したと言われますが、若い人にはSDGsの教育などがかなり浸透しているので、人権意識とか環境問題に関する意識とか、むしろ私の世代に比べて進んだ考え方だったり、感度も知識もあったりすると思います。保守的というのは現状でいいんじゃないかとか消極的な保守、こういう政治状況がもう10年以上変わらず、「民主党政権悪夢の3年間」というのを思いこまされて来ちゃってる子たちがいるわけです。希望を持ったり、野党に政権が変わったらもうちょっとマシになるんじゃないかということを見せてないということが最大の問題だと思います。それは私たち大人の責任です。

2015年にはシールズも出てきたし、社会的にはもっと盛り上がったのに、今みんなどうしているんだろう、私もそういう風に思うことはあります。シールズの中心的なメンバーとは今でも付き合いがあるし、一緒にいろんなことをやっています。しかし、2015年からもう8年たちますから、私たちにとってはたいしたことでなくても、若い人たちにとって8年はものすごいです。人生の大きな変化をいっぱい経験しているということになりますから。同じことを同じようにやれというのはそもそも無理というところがあります。それでも今までいろいろとやっていて、それは立憲民主党の中だったりとか、共産党の周りだったりあるいはメディア関係のところだったり、あるいは学校で教えている人もいます。市民連合なんかも手伝ってもらってる人が何人かいます。どっか行っちゃたわけではありません。

ではなぜ2015年の時のような盛り上がりが今ないのか。いくつか理由があると思いますが、やはりすごく重要なのはウクライナ戦争です。ロシアがウクライナを侵略したこと、今も戦争が続いていることです。岸田さんはそれに乗じて「今日のウクライナが明日の東アジアになるかもしれない」と何十回も言っているわけです。日本のマスコミは、政府が言っていることをそのまんま垂れ流して見出しにしている。「今日のウクライナが明日の東アジアになるかもしれない」って、ロジカルに考えてまったく何の意味もなさないわけですね。確かにロシアのウクライナ侵攻は衝撃だったけれども、一気に他のところも真似しようというほどうまくはいっていないわけです。むしろ短期的に考えれば、中国が台湾を武力制圧するという可能性は確実に下がったわけです。それを全部すっ飛ばして、「今日のウクライナは明日の東アジア」って。ほんとにもう出鱈目ですが、何度も何度も繰り返していると、多くの人がああこわい、あんなことが起きるかもしれないから、日本もウクライナの人たちみたいに勇敢に武器を持って、戦争に備えないといけない、と思っている可能性はあると思います。

Ｇ７の枠組みと「正義のたたかい、自由や民主主義を守る戦い」の危なさ、

ここのところニュースで、G7というのがものすごい出てきますが、G7というのはもう過去のものなんですね。1970年代東西冷戦のど真ん中の時代に、西側の一番お金持ちの国々が経済の調整をするためにやったもので、その中からプラザ合意とかそういうものが出てくるわけです。主として財政とか金融、貿易にかかわって似たレベルにある経済大国がやり取りをする場所・枠組みで、国連の安保理事会などとは関係がないという場所だったわけです。 ところがこのお金持ちグループが、冷戦が終わってグローバル資本主義になって、相対的に地位が低下していくわけです。新興国と言われるような国々が随分豊かになってきて、中国に関して言えば日本を抜いて経済大国第2位になって、GDPが4倍くらいになる。一人当たりGDPで言えば、日本は韓国や台湾にも抜かれる状況で、人口が相対的に多いから何とかG7に入れてもらっているわけです。そういう風に国力が低下しているにもかかわらず、日本にとってはG7という枠組みが「名誉白人」の枠組みで、大変誇り高い。アジア諸国に対する蔑視が抜けない保守の人たちからすると、もうたまんないわけですね。

そういう、ヨーロッパ中心の世界観の中でできてきたものが、ロシアのウクライナ侵略で大変なことになっていると大いに煽ることによって文明を守る闘いに仕立てている。バイデンなんかも「民主主義対専制主義」だと。アメリカ大使がさかんにLGBT差別禁止や同性婚容認と外圧をかけてくるのは、そういう所をある種使って、線を引こうとしている。これめちゃくちゃ危ないわけですよ。なぜ危ないかというと、そうするといよいよ正義のたたかい、自由や民主主義、人権を守るために戦争をしなくてはいけない、ということになってきて、民族自決とか国家主権とかそういう生ぬるいことを言うな、香港を見ろ、台湾がそうなってもいいのか、民主国家を守れ、ということになる。かつて自由の名のもとに西洋諸国がアジア、中国を侵略して植民地支配したことをきれいさっぱり忘れて、自分たちが正義の味方なのだ、という構造を作ろうとしているわけです。

歴史を知らないと若い人たちはそういうのにパクッと持っていかれちゃう訳です。確かに、自由、人権で言えば、中国にもロシアにも誉めるところがあまりないわけです。アメリカがそういうことを言って頑張ってくれているのは大変頼もしい。自由と民主主義を守るために闘うんだと思いこまされているということが出てきていると思います。私なんかの世代の人でも、15年の時はいっしょにやっていたのに、 ウクライナ戦争、台湾有事ということになると、簡単に戦争に持っていかれちゃうだろうというような人が出てきています。自由を守るということをどう考えるのか、戦争はやはり避けなくてはいけない、広げてはいけない、できるだけ早くやめるということを考えなくてはいけないということを、どれだけ説得力ある形で伝えられるのかということが、問題になってくるのだろうと思います。

一番申し上げたいことですが、若い人たちに押し付けるのではなくて、彼らが届くようなところに情報提供していただきたいな、と思うわけです。大事なのはやはり戦争のリアル、戦争っていうのはいったいどういうものなのかということです。第2次世界大戦が終わって80年たって、戦争の記憶、継承というものがかなり弱くなっているのは事実だと思います。私自身戦後世代ですが、新宿の駅なんかに傷痍軍人が物乞いをしていたのが記憶に残っているわけです。当時見ていたようなアニメでも、みなしごが主人公というのが年中ありました。そんな中で一定程度継承されてきたものがあったのが、今はブラウン管の向こうで切り取られたかわいそうなウクライナの人たち、めげずに勇敢に戦い続ける人たち、というのが流されていく中で、やはりある種の空気が作られていて、非戦、反戦ということが何か弱っちい、何かきれいごとを言っているかのように聞こえるんだろうと思います。

戦争ができると思っている方がきれいごと。「台湾有事」で起こること

私は、戦争を日本みたいなところでできると思っている方がよっぽどきれいごとだと思っています。ウクライナはヨーロッパでは第2番目に大きな国で、大陸のど真ん中の、穀倉地帯と言われるところで、ロシアと地続きなわけです。そういう条件の中でやっている戦争と、日本や台湾のような島国で行われる戦争というのはまったく違う訳ですね。中国のタンクは日本には上陸しないわけです。来た時には終わっています。その前にミサイルがばんばん飛んできて、空襲がばんばん来るという話です。国民が戦い抜く決意を、みたいなことを安保3文書は言い出しましたが、何をしろという話なのだと。逃げまどう以外ないわけですよ。志願したってハイテクの武器が使えるわけでも飛行機を操縦できるようになるわけでもない。リアルで考えた時には、我々は何の役にも立たない。そういうことをまったく無視してウクライ

ナの次は、台湾になるかもしれない、日本かもしれない、それで戦争の危機をあおるということがどれだけ無責任な話なのか。国民を守ると言って、戦争が始まったらすぐ国民に国を守れって言う訳ですからね。

もうひとつウクライナ戦争が何を教えるかと言ったら、大国間は直接戦わないということです。ロシアがウクライナを侵略したときに、アメリカは真っ先に「ウクライナは支援するけれどもロシアとは火を交えない」と言っています。それはそうあるべきなんです。そうでなければ核戦争になりますから。軍事ジャーナリストの半田滋さんに教わってびっくりしたんですが、アメリカがウクライナに武器を供与する時に、長い射程のミサイルの性能をわざわざ落として、ウクライナに渡しているんだそうです。 ウクライナがロシアの領土にミサイルを撃ち込んでしまってアメリカ製だということになると、ロシアに戦争拡大の口実を与えて収拾がつかなくなるので、ウクライナに戦場をとどめなくてはいけない。ゼレンスキーも度々「我々はウクライナの国内でしか戦うことは考えていない」と言わなければならない。ウクライナ国土の中、ウクライナ国民が犠牲になるということでしか戦争を続けることはできないわけで、限定戦争であり、代理戦争の色彩も帯びてくるわけです。アメリカの中では、あまり早く停戦とか休戦になったりすると、もうちょっとロシアを弱めてからの方がいいという話が現実としてあるわけです。

台湾有事になったら台湾と日本が戦場になるということなんです。アメリカと中国は100%の確率でお互い撃ち合わないという前提で戦争になります。実際にアメリカのシンクタンクがやったシミュレーションでは、アメリカと中国は撃ち合わない。沖縄にある米軍基地は攻撃の対象になり、どこかの段階で日本がいっしょに戦争をするだろうという前提にはなってるんですが、米軍がどれだけ戦うかということで言えば、中国本土には撃たない。本当にコントロール効かないところまで行っちゃわない限り、台湾と日本を戦場にしてたたかう、ということになるわけです。

そんな国が敵基地攻撃能力とか馬鹿なことを言っている。アメリカの代わりにうちが撃ちますよ、みたいなことを言っているわけです。安倍さんに至っては、敵の中枢機能まで攻撃しないと意味がないみたいなことを言う。でたらめなことを言って、アメリカに褒めてもらって頭撫でてもらって喜んでいるという状態があるわけですが、何を守ろうとしているのかがまったくわからない。多くの人は、中国と米国が戦争という時に、台湾と日本が戦場になるということがぴんときていないだと思うんですね。日本や台湾みたいな島国でそうなったら、もう壊滅的な打撃を受けることになる。

この間、猿田佐世さんのお話を聞いて驚いたのは、琉球新報の方が防衛研究所の人に、中国と戦争になってミサイル撃ちあうとなったら、「反撃能力」と言っても基地だけじゃなくて民間人の被害がどうしても沖縄では出るんじゃないかと聞いたら、「中国の軍事能力は高いので正確にミサイルを撃つものと考えている」という答だったそうです。避難させると言っても、何千人、何万人の人をミサイルがぽんぽん飛んでる、軍艦が出てきたなんていう中で、避難させられるわけがありません。香田さんという海上自衛官の司令官だった人が反撃能力は国会とかに相談してではなくて、現場の判断で撃てないとだめなんだ、一刻を争うことなんだって言いました。一回こっちが早かったとして、そこで終わるんですかって言ったらごにょごにょ言ってましたけれど。どっちが先になんて意味があるわけない。むしろ向こうがやる気なかったのに、勝手に勘違いして撃って、向こうがいつ撃つかは正確にはわからない。しかもそのインテリジェンスがアメリカ頼りになるわけですよ。大学で教えていて、アメリカからの留学生と比べても日本人の学生はアメリカを無邪気に信じている。多くの人が、何かいいものとして守ってくれる、みたいになっています。スネ夫がジャイアンを頼りにするのとあまり変わらないわけです。しかしアメリカは散々他国で戦争をしましたが、自分の国では戦争をしないんですよ。アメリカが守ると言っているのはアメリカの権益を外で守るわけで、中東で戦争をやったりどこそこでやったりをまた東アジアでやるのかという話になっているわけです。

そうすると、その国がやる戦争の判断と、戦場になる国の判断が違うのは当たり前なわけですよ。アメリカからすれば正義の戦争で、この辺で中国を撃って懲らしめておいた方が自分たちのためになるという判断で戦争になったときに、日本が戦場になるのであれば、日本としてはそれは勘弁してください、そんなの日米安保条約の範囲を優に超えているから、我々はできません、ということを本当は言わなくてはいけません。

安全保障の2つの考え方/集団安全保障と集団的自衛権

安全保障と言ったときに二つの考え方があるということを改めてご紹介したいと思います。

そもそも安全保障、セキュリティという考え方は、同盟のことではなく集団安全保障というものなんです。典型的には、国際連盟や国際連合のようなものですが、敵を作らずに共通の安全保障を見出そうという平和外交みたいなことですね。多国間でお互いに共通の敵に対して軍備で守ろうというのではなくて、お互いに安全を保障しあいましょう、ということ。それを国連は「集団安全保障」と言っています。だから、国連のメンバーはお互いに敵ではなく話し合いでやるのが基本なんです。

国際連盟も、人類の初めての大規模な集団安全保障の試みであった訳ですが、日本が満州に攻めていって脱退し、集団安全保障の枠組みが失敗したわけです。集団安全保障というのは、理想的な部分があって、それが立ち行かなくなる時があるわけです。それでも人類はそれを一応目指してきた歴史がある。日本においても、冷戦が終わった時に、集団安全保障ができるんじゃないか、警察業務なら自衛官がPKOに参加してもいいんじゃないかという論法で最初始まったんですね。小沢一郎さんがその時自民党にいましたが、彼は、集団安全保障でPKOには賛成だし、自衛隊を国連軍として常備で置いた方がいいなどと書いていますが、集団的自衛権には一貫してずっと反対なんです。

集団的自衛権というのは同盟のことなんです。共通の敵があっての同盟なんです。そうやって同盟で国を守ろうとすると、結局緊張関係が高まっていった結果、戦争が避けられなくなって、むしろ大変な戦争になっちゃう。集団的自衛権では、自分が攻撃されなくても、仲間の戦争に入っていくということですから、やくざが徒党を組むのと大して違いがないわけですよ。親分が守ってくれるということになっているけれども、チンピラにすぎなかったら「お前あいつ取ってこい」って言われて送り出される可能性があるわけですよ。さらに問題なのは、第1次世界大戦、、第2次世界大戦が同盟対同盟の戦いでその反省の上に国際連合ができたのに、今また同盟に肩を寄せて行っていて、バイデンの話を聞いていると、「民主主義対専制主義の世界最終決戦」の準備をしているかのようなレトリックにまでなっちゃってるわけですよ。それに日本が入っていくのは、止めた方がよくないですか、と。

G7の衰退とバイデンの統合抑止政策

G7やアメリカの国力が衰退していて、ウクライナ戦争の前まではG20 の時代だと言われていたんです。中国、インド、ブラジル、南アフリカ、あるいはサウジアラビアも。それでようやく気候変動だったり感染症だったり、もう政治体制はいろいろあって共通の合意を作っていきましょうという枠組みがあったのに、なんかまたG7が正義の味方で突出して始めちゃったという所で、G7は軍事同盟なのかというような奇妙な状況になった。グローバルサウスが乗ってこないのは当たり前の話です。

バイデン政権は統合抑止と言っています。それには2つの意味があります。ひとつは、アメリカだけではなくて同盟国を使って抑止する。つまり、NATO諸国にGDP2%まで上げなさいとか、日本にも思いやり予算だ、敵基地攻撃能力もやってくれるのうれしいよとか、今までアメリカがやっていた部分をどんどん同盟国にやらせないと、アメリカのお金がもたない。アメリカの世論がもたない、ということで、同盟国にやらせる、といのが統合抑止のひとつです。そこで日本はこれだけやりますよということで、安保3文書を出した。

もうひとつは、抑止というのは軍事だけではなくて経済もあるし科学技術もあるんだという考え方です。実際、戦争が起きる前に科学技術の争いがあって、経済の争いがありますから、それが下手すると軍事に繋がっていってしまうということになるわけです。ファーウェイとかTiktokとかの問題が出てくるのは、中国とアメリカの覇権争いが、軍事面だけではなくその前に経済や科学技術面で中国に抜かれることはまかりならない、と考えているということです。だから、その部分でも日本はきれいにアメリカ側に入って、アメリカと共同歩調で中国を抑え込もうという発想になってるわけですね。そこで日本はこれまで軍事研究をやってこなかった、大学が歯向かってきた、これは許せないということで、日本学術会議の腕をひねって日本の大学でも軍事研究をやれ、学問が軍事の下支えをするようにならなくてはいけない、アメリカを見習えと。アメリカには軍産学複合体というのがあって、それがアメリカの軍事力を支えている。ところが科学技術や経済面ではこのままいくとアメリカは抜かれてしまう。それはまずいから、科学技術や経済の面でアメリカとさらに統合していって、中国と切り離していこうという考え方なわけです。

軍事において中国がアメリカを抜くなんて言うのは、まだまだ遠い先のことで、アメリカはそれくらい

の軍事超大国です。巨万の富をもう何十年、それで国が傾くくらい、福祉だの何だのができないくらいずっと使ってきています。いくら中国がGDPのいくらかを軍事費にあてたって、アメリカとマッチングするなんていうのは遠い話なんです。ただ、2つあって、東アジアということで言ったら、中国が優位に立つ部分が出てくる。もう一つは、軍事で抜かれなくても、その前に科学技術や経済面ではアメリカが抜かれるという可能性が見えてきちゃってる。怖いのは、このまま行くと中国が科学技術や経済で抜いちゃうから、軍事がまだ優位なうちに台湾を口実にして一回中国をたたいて、それも日本にやらせるということができるなら、それをやってアメリカの優位を維持しようと。ワシントンの主流になるというところまでは幸い行ってないですが、そんな中で、同盟強化で日本が安心・安全なんて言ってる方が、よっぽど危ないという話です。

同盟・抑止は安全安心を保障しない　私たちの課題

同盟による抑止、集団的自衛権というのは戦争になったら同盟国も参戦すると威嚇することによって、安全保障をしようとするものです。抑止が失敗すると戦争の拡大につながり、世界大戦にもなってしまう。同盟イコール安定的で安全ということにはならない。同盟がせめぎあって世界大戦が二度起きたということを忘れてはいけないということです。NATOとワルシャワ条約機構があって冷戦にアメリカが勝ったというイメージが強いので、アメリカがボルテージを上げていけば、中国もいずれ崩壊するんじゃないかという期待があるんだろうと思いますが、そうはならない可能性が高い。中国の経済はどんどん上がっていて、昔のソ連の経済がどんどんダメになっていったのとは全然違います。

軍事力を高めたら抑止力が上がるというのはでたらめなんです。軍事力を高めた結果、威嚇は確かにしたんだけれど、それで戦争が未然に防げるかどうかは、それだけでは決まらないわけですね。ウクライナとロシアの関係についてもそれは言えます。日本もこれから5年間で倍増しますと岸田さんが誇らしげに言ったわけですが、それを見て中国が「わかった、5年間待ってるね」ということにはなりません。むしろやる気なのかお前、となったら、威嚇合戦になって高く上がっちゃったところでぶつかるというのが、安全保障のジレンマと言われるものです。そういう可能性を語らずに、軍事強化をすれば抑止が高まるみたいなことを言うのは、安全保障のイロハのイもわかっていない議論だということになります。

同盟だ、抑止だといっても、それで台湾有事というものが防げるわけではありません。かえって台湾有事と言われるものを惹起する可能性があるということを語らずに、とにかく日本がアメリカといっしょになってやれば、うまくいくと言うのは絵空事です。アメリカというのはあちこちで戦争をしてもたまにしか勝たない。何故かというとアメリカがある種の民主国家であるからでもあるんです。ベトナム戦争の時にはベトナム反戦運動があって戦争の継続が正当化できなくなりました。だけどベトナムの人たちから見れば、やってきてばんばん殺して、ナパーム弾を使って、それでいなくなったわけじゃないですか。

台湾についても、軍事力で守れると思う方がおかしいんです。中国は巨大な国で、そこから見ると台湾ってほんとにちっぽけなんですね。それを考えた時に、中国が台湾を武力で制圧するメリットがあるのか。台湾が独立をしようとしない限り、あるいはアメリカが介入して煽ってるとか内政に手を出してるという風に中国が見ない限りは、中国の側からここ数年、あるいは10年くらいのあいだに積極的に事を起こす経済的なメリットはあまりないわけですよ。台湾が持っている産業をぶち壊して、台湾の人々をバンバン殺して、台湾の人たちの憎悪の対象になって、それで制圧することの意味がどれだけあるのか、ということです。

台湾にとって一番いいのは現状を維持することで、できるだけ長く現状を維持することによって、中国には武力制圧は考えない方がいいですよということは伝えつつ、我々は許さないということを言いつつ、ただ同時にひとつの中国であることを理解し、尊重するということを示すことです。日本は台湾を植民地にしていたわけですから、その日本が台湾を守るなんてことを言ったら、北京の側がそれをどう受け止めるか想像がつきそうなものです。それを全く理解しないで煽るということはむしろ危ないし、台湾の人たちのためになりません。戦争を回避することを考えたら、考え方が異なる政治体制であっても、それは平和外交の中で解決するということにせざるをません。

2つ大事なことがあると思います。一つは、他人さまの国に入っていって説教をするくらいに人権や民主主義が日本で守られているのか。そういうこともちょっと考えてからものを言いませんかと。過去やったことの反省もなければ、現状の内省もせずに、えらそうに一方的に言うということがどう受け止められるか想像したことがあるのかというのが一つ。もう一

つは、確かにひどいということがあったときに、武力介入して正義の戦争をやってそれを止めることができるのかということです。ハリウッドの映画のような世界に生きていないというのが核時代の世界なわけです。

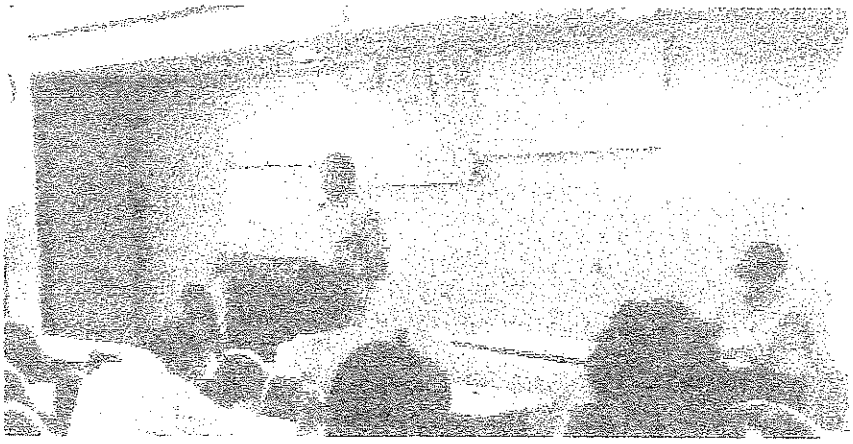
そういう厳しい時代の中で、どうやって国内で人権や法の支配や民主主義を回復させていくのか、そういう政治を作り直すことによって、憲法を無視して戦争の準備していくようなそういう政治を止めることができるのか、そのことによってどうやって、台湾有事と言われるような緊張を軽減してくことができるのか、ということが非常に大きな問題になってくると思っています。

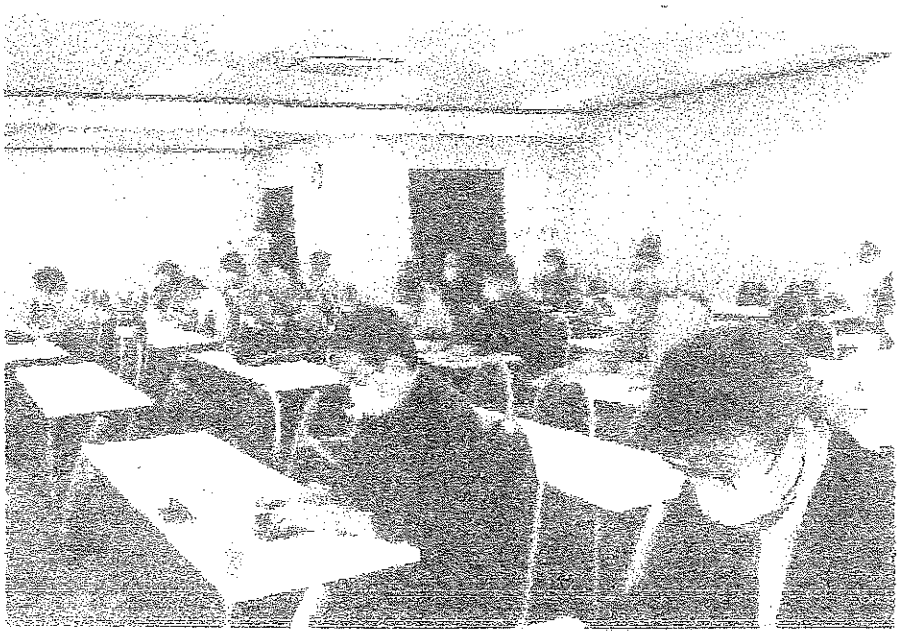
＜参加者からの質問＞※回答も極めて充実した内容でしたが、紙幅の都合で割愛させていただきます。

① 日本はアメリカの植民地なのか。「植民地的」という言い方もあるがどう考えるか。

② 台湾有事はという発言は、日本を意識したものか、アメリカ国内の事情なのか。また、今の日本の状況は1930年代と似ているのではないか。日本の大衆の状況をどう考えているか。

③ 北朝鮮のポジションで、台湾とかそういうところにどう絡んでくるのか。





あれもこれもの沖縄辺野古応援ツアー

甲野信夫

今回の沖縄旅行は盛り沢山でした。

沖縄に行かれた方はご存知でしょう、那覇空港に着陸する10分ほど前から飛行機は高度を下げて低空を飛び、窓の外・眼下に青い海が間近かに見えます。初めて沖縄に行ったとき「機長の好意で青い沖縄の海を見せてくれているのかな」と思ったものです。でも、その後、那覇空港の空域はアメリカ空軍の戦闘機や輸送機が上空を飛ぶので日本の民間機は低空を飛ばなければならないと知って複雑な気持ちになったものです(首都東京上空を外国軍機が飛ぶことを思えば驚くに当たらないか)。

那覇空港はスーツケースを引く本土からのノーマスクの観光客でいっぱいでした。昨年12月に行ったときは空港ロビーもゆいレールも人はまばらでしたが、今回はゆいレールの車内は朝の出勤ラッシュのような混雑でした。退職者会のツアー日程より早く沖縄入りした僕は、ゆいレールとバスを乗り継いで沖縄中部の沖縄市(コザ)に一泊して翌日名護に入りました。

座り込みの今

名護のホテルから路線バスに乗って辺野古の座り込みへ。午前9時キャンプシュワブのゲート前で「機動隊の隊長が白い指揮棒を上げ、前に倒すと、それまで横一列に並んで立っていた若い隊員たちが、・・・ゲート前に座り込んでいる人たちに襲いかかった。ゲートの内側でハンドマイクを手にし、喚いている作業服を着た男達の声がうるさくてならない。白いヘルメットをかぶっている彼らは、作業員ではなく沖縄防衛局員だ・・・。機動隊員は三カ所に分かれ、座り込んでいる人達の前で体をかがめ、説得しているようだったが、じきに腕をつかんで強引に立たせ始めた。」(目取真俊「闘魚」)・・・と以前は機動隊がごぼう抜きして排除し、金網の檻に隔離するということが常態だったのですが、今は一定程度座り続けたら立ち上がって移動するというある種「牧歌的な」座り込みです。コロナ感染の広がりもあって、座り込みは人と人との接触を避けるとのことです。ある人はそんなセレモニーみたいな座り込みは意味がないと馬鹿にしたと聞きますが、座り込みで工事を遅らせることは出来ても、阻止できるとは思っていません。工事の阻止＝中止は政治の世界で決められることだと分かっています。だから座り込みは「軍事基地建設反対・抗議の意思」を表し続け、政治を変える試みだと思っています。

ところで、今回その「牧歌的な」座り込みの中で若い機動隊員に「沖縄は本土からバカにされてる、大阪府警や警視庁の機動隊に沖縄県警はバカにされている」と話しかけたら、「あなたもバカにしてるでしょ」と真っ当に応えてきました。ん～、困った！ 彼はヤマトゥ(日本・人)がウチナァをずっと差別してきたことを知ってる！ 「確かに僕もバカにしてるかもしれないが、ただそれを自覚してはいるからここに来ている」と応えるも、反対側の歩道に渡って、なお機動隊員と話し続けている間、本土による沖縄差別を放置している事実はずっと重く心に澱んでいた。誤解を恐れるので付言すれば、当初は強権的・暴力的な政府(防衛局)

・機動隊の排除に対して、粘り強い強固な座り込み抗議行動がずっとずっと闘われてきているのだということは忘れてはならないと思う。

辺野古埋立ては全体の15%、大浦湾は未着工

1995年の三人の米兵による少女暴行惨殺への怒り・抗議をうけ、翌96年の普天間基地返還合意となったけれども、それは港湾設備・弾薬庫等、普天間にはない施設が加えられ、正しく「新基地」建設として強行されている。埋立てが始まって5年、全体の15%の埋立てが進んでいる。大浦湾側は工事の承認が沖縄県から得られていないし、大浦湾は活断層もあり、何より水深90㍍にマヨネーズ様の軟弱地盤があることが分かっている。埋立完成はおぼつかないわけで、「一日でも早い解決」とさすがに政府も言わなくなっています。

2日目の朝の座り込みをしてから、ツァー本体と合流すべく那覇に戻ったのですが、いささか拍子抜けのニュースを伝えなくてはなりませんでした。6月23日沖縄慰霊の日に岸田首相が来るので辺野古の機動隊も警備に動員され、トラックの土砂搬入はないという知らせです。2泊3日のツァーのスケジュールはさて、どうするか。

トラックの土砂搬入、安和・塩見の土砂積み出しがなくなり、ツァー参加者一同相談した結果、ともかく辺野古ゲート前のテントに行くことに、また海岸のテントへ行って現地の人たちから最近の状況を聞きながら埋立地を遠くに眺め、護岸が埋め立てられ多くの生き物が生きられなくなっていることに思いがいく（72年の「本土復帰」以降、島全体の自然海岸線が急速に壊されているという）。

佐喜眞美術館・陸軍病院壕へ

今回のツァーでは南部へ行くことに決まった(昨年は伊江島の阿波根昌鴻さんの命どう宝・反戦平和資料館に)。前日から沖縄に来ていた岩木さんから佐喜眞美術館の「丸木位里・俊原爆の図」は全14部が展示されて迫真性あり必見との言葉があり、名護より高速道を南へと1時間程下り佐喜眞美術館へ。普天間基地へ突き出るようにある美術館は、米軍と折衝して佐喜眞家の土地を返還させて建てられたという。屋上から普天間基地を眺めると、学校もあり、市街地の真ん中に基地があることが分かる。「沖縄戦の図」全14部を見る。まず絵の大きさに驚き圧倒される、お爺お婆から沖縄戦の実体験を聞いて描いた画は立ち止まらせ目を引き付けさせる。暗い墨絵の下に隠されて、多くの人たちの体(屍)は目を凝らして静かに見つめていなければ見落としてしまう、見ようとしなければ。

その後、落ち着いた運転で道を間違えることなく進んだ河野和尚の車は、一足先に南風原文化センターへ。住民の44%3500人超が戦死した南風原町は調査・記録を基に秀逸な展示をしていました。展示は壕の再現、日本軍進駐後の村の変化、学童疎開や慰安所の場所などが説明されており、ツァーリーダーの平岡さんが「ここには時間をかけてまた来よう」ともらした言葉で濃密な内容あることがお判りでしょう。

文化センターからひめゆり学徒220名が使った「飯上げの道」を歩いて陸軍病院壕へと向かう。道は両側から迫る樹々に陽光が遮られやや薄暗く、・・・学生の息遣い、逃げまどう人々の叫び・怒声を耳にするのは幻覚と言い切れぬよう、ヘルメット被り懐中電灯を持って15分ほどの病院壕を歩きながら壕内の天井は低く、じっとりする湿気がよりその狭さ、暗さを皮膚で感じさせるかのよう、そしてうめき声と砲声を聞こうとする・・・。病院壕の前に「九条の碑」があり日本語と並び英語・中国語・朝鮮語で九条条文が刻まれており、そのハングル文字を岩木さんが訳して、ガイドさんを驚かせていたのも忘れえぬシーン。今回のツァーでは多くのシーンが新たに記憶に刻まれて・・・道の駅「かでな」の新しくできた展望台から嘉手納基地を眼下に見ながら米軍機の離発着の爆音を聞いたこと、日退教・安次嶺さんの案内で普天間基地に隣接しずっと爆音にさらされている幼稚園、平和の礎・韓国人慰霊碑の見学、彫刻家金城実さんのアトリエを訪ね30分ほどの話を聞けたこと、返還後の北谷(ﾁｬﾀﾝ)のアメリカ風の街並み見学などなど、本当に盛りだくさんのツァーでした。

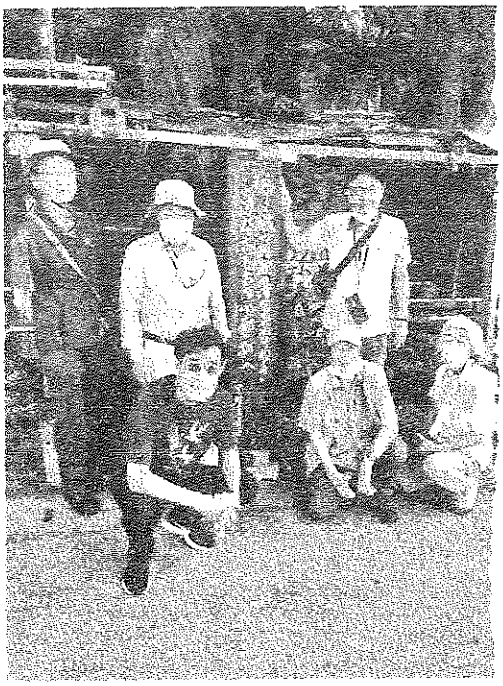
沖縄の不安・危機感との共感から

今回沖縄の人たちから「沖縄がまた戦場にされる」のではという心配や不安、いや怒りを耳にしました。南西諸島に「迎撃ではなく敵基地を攻撃」する自衛隊のミサイル基地が配備され「島民避難計画」が語られ、石垣市では「遺体収容訓練」が行われている訳ですから当然でしょう（対外強硬派の石垣市長は「遺体収容訓練」は大規模災害死のためと言っている）。78年前に「捨て石」にされた沖縄、知事選・住民投票と何度も新基地反対の意思をその都度無視するかのような本土政府・本土人、沖縄の人々が怒りとともにやりきれぬ思いがあることも感じる。でも、沖縄の人々が無力感・脱力感を感じていながらだろうけれど、「再び沖縄を戦場にしてはならない」とふり絞って立ち上がっているように思える。本村富美子さんが生前「来るたびに沖縄から元気をもらっている」と常々語っていたのは、そのような沖縄人・琉球人の心を見ていたのだろう。ときに障害に遭い隘路に陥ったりした時、一瞬不安げな表情を見せながらも次の瞬間には顔上げて立ち向かう本村さんの姿は、ウチナンチュ・沖縄人に重ねて生きたのではないかと思わせる。

今回のツァーで感じたのはone issueの旅行ではなく、プラスαの旅行をしませんかということです。岩本さんがツァーより前に佐喜眞美術館を見たり、中川さんが与那国島行き、僕もまた沖縄のコント集団「お笑い米軍基地」の公演を見たり、かつての教え子と会うなどそれぞれツァー前後にプラスαのプランを入れてました。辺野古座り込み支援だけでなくプラスαで次回ツァーに多くの方が参加されるよう願うばかりです。

最後に沖縄在住の作家目取真俊さんの言葉を――

「こういう状況で必要なのはとにかく人手だ。私はカヌーによる海上行動を中心に参加しているが会場でもゲート前でも、もっと多くの人が集まれば工事を止められるのに、といつも思う。・・・抗議の現場に出るには時間と金を費やし、機動隊や海保の弾圧に身をさらすことになる。しかし現場で抗議する人が増えなければ、工事を止めるどころか、遅らせることすらできない。あなたはどうするのか？」（目取真俊『ヤンバルの深き森と海より』影書房）



「香を放つ月桃の葉よ茂りゆき辺野古をおほふ邪払へ」の歌を囲んで

「高退教活動って、何・・・・？」

2023年10月
日退教九ブロ 熊本高退教
報告者　木田文博

1　はじめに

以前この集まりで、「不合理には退職しても怒りますよ！」という題で報告して7年間が過ぎ去った。その時の内容は、かっての同僚の「再任用不採用」問題に関わる裁判闘争、福岡高裁で勝利したことを中心に、報告した。この時、私は「9年ぶりの新年会」というテーマで、高退教活動についても、報告している。

私は2011年の春、定年退職をした。退職するまで3度教師をやめたい、と思ったことがある。だから定年時に、短時間の再任用でもするたい、と同僚から言われても、再任用なんて、全くする気はなかった。しかし・・・今は全日制と（公立）通信制の2校で、非常勤講師を8年間も続けている。

そしてこの8年間の「パート教員」生活と、主に「非常勤講師の待遇改善」に関わる組合活動、現役時代から関わっている、「定時制通信制の灯を消すな！」という定時制、（公立）通信制の「存在意義と必要性」を考える会の活動、そして高退教の地区委員としての活動が、私の社会との接点である。

2　再開した地区新年会だが・・・

7年前の報告文に私は、「退職して時間の余裕が出てくると、多忙で管理的な教育現場から解放され、ほっとした気分になるが、次第に組合との距離が遠のき、何か寂しさを感じていった。多くの退職者（組合員）は定年を一区切りとして、組合から学んだ気持ちは持ちつつも、組合とは疎遠になっていくことが普通だろう。」と書いている。そして「こんな寂しさと、高退教のことを、約27年間飲み仲間としている（現在90歳の）元同僚の大先輩に、いつものように飲みながら語ると、木田さんが頑張るなら、いっしょに地区活動をつくろう。」と言われたことを書いている。

この時最初の地区活動として始めたのが、9年ぶりに再開させた新年会である。その新年会もやがて10周年となる。

再開させるためには、600人程いる地区会員へ、新年会再開を知らせる、「案内文」の送付が必要となる。地区活動費は全くないので、高教組にお願いし、1回限りということで、郵送費を支援してもらった。そして新年会費として集めた会費の支出残金を、地区活動費にするため、民間の会場を使わず、組合が所有していた会館の一室を利用し、少しでも多くの残金をつくるように心がけた。

当初、私は会員が600名程いるので、50名は超える再開新年会が出来るだろうと楽観的な気持ちで、準備をすすめていたが、しだいに「参加する」、というハガキよりも、「不参加」のハガキが多く届き、不安となった。どうにか他地区の会員にも呼びかけて、40名程を集めることが出来たが、大変苦労した再開1年目の新年会であった。

しかし参加した地区会員とともに退職後に歌う、「緑の山河」と「団結ガンバロ」、そして地区会員の「近況報告」は、久しぶりの組合的な心地良さを感じさせ、準備面での苦労、不安を一気に消し去った。また4階ホールで行った再開新年会は、階段の辛さ、退職した年齢を感じさせた新年会でもあった。

3　年4回の「企画と地区便り」で、一人でも多くの地区会員を繋ぎたいが・・・

私たちの地区活動は6名の地区委員が話し合って、新年会等の企画をしている。と、言っても私が「こんな企画をしたら」、と提案し、飲食をしながらの話し合いで決める。大先輩をはじめ、男性5名の地区委員は、お酒が大好きなので地区委員会で話し合っても、議

論が別なこととなり、どう決まったのか、よく分からないままで終わることが多い。でも楽しい地区委員会である。

再開させた新年会で感じたことは、地区会員をどうすれば参加させることができるか、であった。そこで年1回の新年会だけではなく、大変だが年4回の企画に取り組み、活動内容は地区便りを通して、ひとりでも多くの地区会員に伝えていった。しかし郵送費の関係で、地区便りを送付できたのは、1／6の地区会員であった。

新年会再開1年目は、4月に「ハイキング」、6月には「病と向き合う」というテーマで病と闘ってる天草地区会員を講師にした企画、11月には「現代に生きるとは」という題で、80代の熊本地区会員と、10代の高校生平和大使の高校生を講師にしての学習会を、企画した。しかし参加した地区会員は、再開した新年会同様、期待していた程は参加させることは出来なかった。

(2013) 「新年会」　「ハイキング」　「病と向き合う 2」　「終活」
(2014) 「新年会」「ハイキング」「歴史探訪・荒尾、飯塚（宮崎兄弟生家資料館、旧伊藤伝上門 ）」 「九州博物館（台北故宮博物館特別展と白秋と鰻」
(2015) 「新年会」「熊本市島崎地区探索（島田美術館等）」 「歴史探訪・荒尾、大牟田（万田抗、石炭層見学、稲荷（とうか）神社、宮浦抗、中国人労働者殉難者慰霊塔、韓国朝鮮人労働者の鎮魂碑）」
(2016)熊本地震 「新年会」　「秋の平和を考えるバス旅行（御所浦島）」
(2017) 「新年会」「秋の来民文庫と大逆事件顕彰碑と鞠智城歴史資料館への旅」
(2018) 「新年会」
(2019) 「新年会」「歴史探訪（川尻町）」「江津湖の屋形船で楽しく食事会」

4　高退教総会の2次会で・・・・

地区活動を始めた頃のことであるが、私は高退教総会後の2次会で、そんな高退教なら、「やめる！」と言って、2次会場を飛び出したことがある。高退教の活動のあり方について、話題がのぼったさい、高退教は、「互助会的な集まり」、と言われ、議論白熱となった末の出来事である。

慌てて会員の一人が後を追ってきて、「規約もあり、運動方針もある高退教が、互助会的な集まりではずがない」、と私に言ってくれた。この時、「高退教なんてどうでもいいや」と、しばらくは思い続けていたが、「いっしょに地区活動をつくろう」、と言った大先

輩の姿を思い浮かべると、私は高退教を切り捨てることが出来なかった。

そんなこともあってか、私は地区活動での企画には、「高退教としてのポリシーがないといけない」、とよく言う。私が言うポリシーとは、かって組合から学んだ、平和、人権等の視点である。単なる歴史探訪ではいけないと、私は思っている。

昨年の春頃、一部の地区会員宅へ、新年会のようすを記載したプリントを作成し、「高退教熊本地区便りを持参してまいりました」、と言って回ったことがある。地区便りの郵送とは異なり、地区会員の顔が見える取り組みであった。不機嫌そうに出迎える地区会員もいたが、総じて、快く対応してくれた。中には痛む脚、体に器具をつけた地区会員も出迎えてくれた。この時、こうした顔の見える地区活動が出来るならば、もっと地区会員との距離が近くなる、と感じた。現実は難しい取り組みであるが、また手配りの地区便りの配布を試みてみたい。出欠ハガキに書かれる、「反戦平和を望みます」という文面だけでなく、顔を合わせることによって得られる元気も大切だと思うからである。

2019年度の定期総会の議案書には次のように書かれている・・・・・

①憲法改悪に反対し、平和、脱原発社会の実現に向けて、②消費税増税に反対し、豊かに暮らせる社会保障の実現に向けて、・・・という運動方針（案）が・・・。

5　他界していた、かっての同僚会員・・・・

昨年の秋、35年以上お酒を酌み交わしてきた地区会員であり、同僚が一人寂しく入院先の病院で他界した。元同僚会員の現役時代は生徒指導部長を担当するなど、生徒指導には熱心な先生であった。ただ生徒指導のあり方については、私と考え方が少し異なってはいたが、組合という点では仲間の先生であった。最後の地区活動への参加となった、昨年の新年会では、「もう酔っ払ったたい」といいながら、「木田先生、〇〇先生、いつも助けて頂いてありがとうございます。今日のこの日を非常に楽しみにしておりました」、と語り始め、写真撮影をする私に、「もういいよ、見てごらんなさい、この骸骨を」と言って、かっぷくのよかった体つきがやせ細ってしまったこと、新年会を心待ちにしていたこと、そして組合に対する思いを3分ほど熱く語った。

同僚の定年後の晩年は寂しいものであった。パートナーと先立たれ、次に息子にも先立たれた元同僚を励ますために、私たちは時折近くの居酒屋でお酒を酌み交わした。だから熊本地震の時も、息子が亡くなったときも、私たちへ救いを求めてきた。そんな同僚の体の異変に、私が気がついたのは、他界した年に開催された高退教総会日である。毎回参加していた同僚が、不参加というので、総会前に自宅へ訪ねると、地区新年会後から体調不良が続き、しばらく入院したと語った。そして3ヶ月後に酌み交わしたお酒の場が、最後の3人での会話となった。1週間後に、亡くなったことを近所の方から聞かされる。

この時、一人寂しく最後は何も語らずに他界した元同僚の姿を思うと、こんな地区会員がいたという証を、手記という形で残したい思いが、より強く湧き出た。

6　おわりに

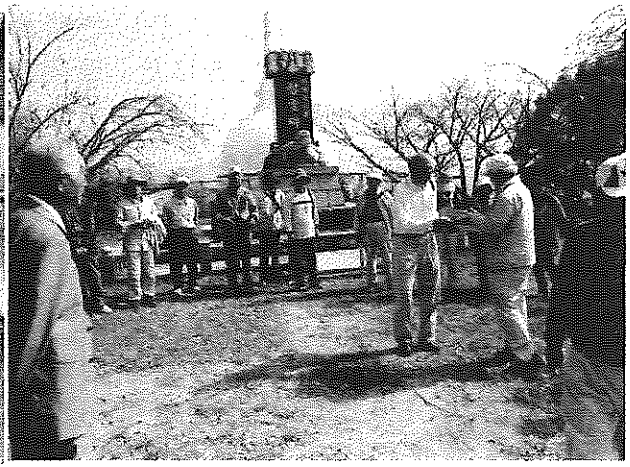
2016年熊本地震が発生する前では、年4回の地区活動と地区便りの作成に頑張っていたが、3年目にしてやっと、企画の方は年3回取り組むことができた。しかし地区便りの作成、配布は以前のようには作成することが出来ない。

また拠り所となっていた組合の建物は、すでに解体され、大きな痛手である。組合の建物で地区新年会をしていたから、参加していた会員もいる。また建物があったから、出来た企画もあった。今は年3回の企画と、原稿が思うように集まらない手記作成をどのような形で仕上げるかに、頑張るしかない。

以前、大先輩は『少年A』というタイトルで自分の生い立ちを記した文章を、私たち地区委員会に持ってきたことがある。この時大先輩のように、他の地区会員にも同じような文章を綴らせたいな、と思ったことが、手記作成への思いの始まりである。

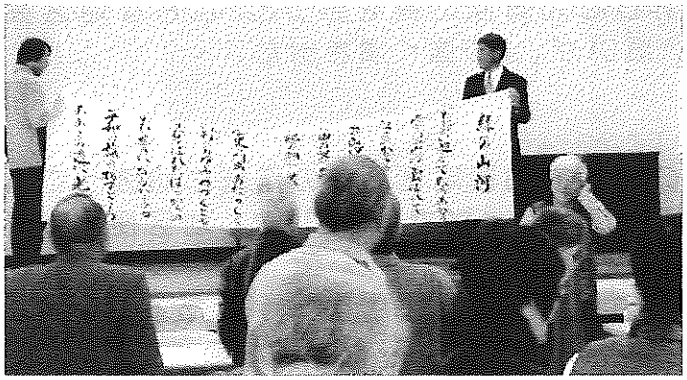
今まで地区活動の企画に姿を見せていた地区会員が、健康面、家族の介護、突然の訃報等で、会えなくなると、寂しいものである。時には地区活動への熱意が冷めてしまいそうになることもあるが、大先輩と5名の地区委員とともに、もうしばらくは地区委員会で楽しくお酒を飲みながら、頑張ってみようと思う。

「宮崎兄弟生家資料館」(荒尾市)



「徴用犠牲者慰霊碑」(大牟田市)

「大逆事件顕彰碑」(山鹿市)



「はだしのゲン」削除問題から考える　　2023,10,13

広島県退職教職員協議会　　石村　政利

（1）「ひろしま平和ノート」について

広島市教委は２０１３年から平和教育の副教材として市内の全小・中学校・高校で使用してきた「ひろしま平和ノート」の改訂を２３年２月に発表し、４月から改訂版の使用を強行した。特に小学校３年生で学習していた「はだしのゲン」の削除は全国的にも注目するところとなり、様々な反対の動きが起こっている。広島においては２０日ほどで５６０００人以上のオンライン署名を集約し、広教組や市民団体・被爆者団体等から削除撤回の要請が数多く寄せられ、広退教は５月２２日に要請を行った。（要請文と市教委の回答は別紙の通り）

広島市教組が市内小学校３学年担任を対象に３月に行った「ひろしま平和ノート使用に係るアンケート」を報告する。（４１校８５人の回答）

① 平和教育の授業で平和ノートを使った　　１００％

② 「はだしのゲン」を平和教材として使ってみてよかったか？

・よかった 68.2%　・よくなかった 1.2%　・どちらでもない 30.6%

③ 今後も「はだしのゲン」を教材として使いたいと思うか？

・思う 49.4%　・思わない 3.5%　・どちらでもない 47.1%

このアンケート結果からも、「なぜ今はだしのゲンの削除なのか」大きな疑問を持たざるを得ない。

今回の「ひろしま平和ノート」改訂に向けて市教委は２０１９年から検証会議（４回）や改訂会議（６回）を行っている。検証会議の中では、「はだしのゲンの場面が子どもたちにわかりにくいのではないか」という意見はあっても、「はだしのゲンを削除すべき」という意見は出ていなかった。それにもかかわらず改訂会議では、はだしのゲンを削除することが前提となっていた。このことは報道でも指摘され議会でも追及されたが市教委は「教育委員会の権限で削除をした。」と述べるだけである。

（2）削除されたのは「はだしのゲン」だけではなかった

中学３年で教材「第五福竜丸」が削除されていた。「第五福竜丸」の削除は原水禁世界大会誕生の大きな原動力になった反戦反核の市民運動の意義を削除することにもなる。

高校１年では被爆者である中沢啓二さんのインタビュー記事から被爆体験が削除された。中沢さんの壮絶な被爆体験を共有することで、「戦争は絶対にしちゃいかん。核兵器を絶対になくしていかなくちゃいけない。」という強い思いが伝わるが、改訂版では反戦反核の強い思いは伝わらない。

（3）代わりに差し替えられた主な教材の問題点

①高校１年教材「８時１５分～ヒロシマで生きぬいて許す心」

（美甘章子・みかもあきこ）

中学３年教材　美甘章子さんの言葉と活動の紹介

＊父　美甘進示さんからの教え

・アメリカが悪いのではなく戦争が悪い

・人間の弱さが戦争につながる⇒戦争の原因は個人の心の問題か！

・どちらが悪いという考えは全く意味がない
・原爆を落としたアメリカ人を憎むな
②中学２年教材　２０１６年５月オバマ大統領平和公園訪問の時の写真
日本とアメリカのパートナーシップの強調（日米安保政策、核抑止政策）
（４）「はだしのゲン」の削除等今回の改訂のねらいは何か？
今回の改訂を分析すると
① 被害の実相を伝える教材や核兵器廃絶を求める被爆者・市民の強い願いが大幅に削除された
② 原爆を投下したアメリカを許し、和解を方向づける教材が大きく取り上げられた
③ 核兵器廃絶を考える学習から、核抑止・核軍縮を考える学習へと変わった
ということが見えてくる。
５月１９日から３日間広島でＧ７広島サミットが行われ、岸田首相は声明「広島ビジョン」で核抑止論を容認した。広島選挙区選出の首相が広島の地において核抑止政策を容認したことは、被爆者や広島市民が核兵器廃絶ではなく核兵器の存在を前提とした核抑止政策を認めたということに他ならない。これまで被爆者が体験した悲惨な人道に反する出来事を発信することで、ヒロシマは核廃絶を世界に訴えてきた。そのヒロシマが核兵器を容認したということは核兵器廃絶の絶対的な根拠を世界が失うということでもある。この「広島ビジョン」と今回の改訂は決して偶然の一致ではない。政府の核抑止政策を広島市が受け入れた結果だということだ。
ウクライナ戦争が泥沼化する中、台湾有事や「北朝鮮」からのミサイルによる危機感を過剰にあおりながら、岸田政権は「安全保障に関する防衛３文書」を閣議決定した。防衛費を５年間で実に１．６倍に増やし、専守防衛という憲法上の原則を破棄した「敵基地攻撃能力の保持」が書き込まれ、奄美・沖縄諸島から台湾の東側にかけて米軍と自衛隊のミサイル基地建設が着々とすすめられている。岸田首相が「堅持する」とうそぶく「非核３原則」はすでに見直しに向けて着々と準備がすすめられているのだ。Ｇ７サミットを被爆地で開催しそこに「核抑止論」を持ち込んだ意図は、米国との「核共有」を見据えた地ならしを被爆地ヒロシマで行うためであり、そうした政府の意図と「はだしのゲン」削除は決して無関係ではない。
「はだしのゲン」を今一度読み返してみた。「はだしのゲン」は子どもたちがゲンの言動に自分自身を重ねて、戦争や原爆被害の実相や戦争の不条理さを学ぶことができる優れた平和教材である。特に作者中沢啓二さんの生きざまから戦争を憎み平和の大切さを実感できる平和教材である。子どもたちは「はだしのゲン」の学習をきっかけに学級文庫や図書館で漫画「はだしをゲン」を自ら読み学ぶ姿が多く見られたという現場の声をよく聞く。「ひろしま平和ノート」から「はだしのゲン」が削除されるということは、子どもたちが「はだしのゲン」に接する機会が奪われるということになる。つまり戦争や原爆被害の実相や戦争の不条理さを学ぶ機会が奪われるということである。
「はだしのゲン」を学ぶ機会を全国の子どもたちに保障していこうではないか。

令和５年６月１日

広島県退職教職員協議会
会長　石村　政利　様

広島市教育委員会
学校教育部指導第一課
課長　高田　尚志

「広島市教育委員会による平和学習教材『はだしのゲン』削除に
強く抗議し、撤回を要請します。」への回答について

令和５年５月２２日付けで提出されましたこのことにつきまして、回答いたします。

この度は、貴重なご意見をありがとうございました。

本市の平和教育の目標は、「ヒロシマの被爆体験を原点として、生命の尊さと一人一人の人間の尊厳を理解させ、国際平和文化都市の一員として、世界恒久平和の実現に貢献する意欲や態度を育成する」ことです。この目標の下、平成２５年から実施している平和教育プログラムにおいては、小学校低学年段階では、「生命の尊さや人間愛に気付く」こと、小学校高学年段階では「復興の過程を理解する」こと、中学校段階では「世界平和に関わる問題について考察する」こと、高等学校段階では「平和で持続可能な社会の実現について展望する」ことを、４つの発達段階ごとの目標としています。

さらに、例えば、小学校低学年段階においては、１年生では、「大切なものに囲まれて生活していることに気付き、生命や平和を大切にしようとする心をもたせる」こと、２年生では、「生命あるすべてのものをかけがえのないものとして尊重し、平和を大切にしようとする心をもたせる」こと、３年生では、「家族の絆を通して、平和を大切にしようとする心をもたせる」ことを目標として設定しています。

この度の平和教育プログラムの改訂にあたっては、まず、改訂の必要性について検証を行うため、平成３１年度に大学教授や学校関係者で構成する「平和教育プログラム検証会議」を設置し、「被爆の実相を理解し、確実に継承することができるものとなっているか」、「学んだ事実をもとに考えたことを発信していく力を身に付けることができるか」、小学校１年生から高等学校３年生までの「発達段階に即しているか」、「教材の資料等は最新か」の４つの観点に沿って検討した結果、プログラムの内容である「ひろしま平和ノート」に掲載している各学年の教材について、資料の時点修正等も含め一部見直す必要があるという結論となりました。

次に、令和２年度から４年度にかけて、「検証会議」の結果を受け、現行の教材で授業をするうえで課題があるという意見が出されたものについては、教員で構成する「作業部会」で、素材や指導の流れ等を変更した試案を作成した後、大学教授や学校関係者等で構成する「平和教育プログラム改訂会議」で検討を加え、専門的な視点からの意見や試行授業を行った現場の教員の声、児童の感想等を踏まえて改訂案を策定しました。

ご意見いただいた小学校３年生の教材は「家族の絆を通して、平和を大切にしようとする心をもたせる」ことを学習の目標としており、「はだしのゲン」の作品からいくつかのコマを教材の中に引用し、授業を行っていましたが、検証会議の委員である教員から、引用したコマをもとに学

２０２３年5月２２日

広島市教育委員会
教育長　松井　勝憲　様

広島県退職教職員協議会
会長　石村　政利

広島市教育委員会による平和学習教材「はだしのゲン」削除に強く抗議し、撤回を要請します。

日頃より、教育の発展にむけ、ご尽力されていることに深く敬意を表します。

私たちは、「二度と教え子を戦場に送るな」をスローガンにかかげ、日本の平和と真の民主教育をめざし、県内各地域で行われる「原爆死没者慰霊祭」や被爆の実相の継承などの活動をしている団体です。また、退職後も現職教職員の悩みを聞き、活動について支援をしています。

さて、中国新聞２０２３年２月１６日付け記事によると、貴教育委員会が、平和学習教材の中に掲載されている「はだしのゲン」が「被爆の実相に迫りづらい」として削除するという報道がされました。主人公「ゲン」が家族を養うために浪曲を歌ったり、池の鯉をとったりしている場面について、「今の子どもたちに説明できにくいから」という担当者の話も掲載されていました。それらを理由として平和学習教材のなかから「はだしのゲン」を削除するという行為に、強い憤りをもって抗議します。

作者中澤啓治さんは、ご自身が「8月６日」の言葉にできないほどの凄惨な被爆体験を、そして自らが被爆者であるが故にうけてこられた「原爆被爆者に対する差別」がどんなに悲惨であったかを「はだしのゲン」に託し、「いのちの尊さ」「平和の重要性」を訴えて作品を描きました。この作品は今様々な国の言語に翻訳され、世界中の人々が「はだしのゲン」を読み被爆の実相について学んでいるのです。

広島市教育委員会のホームページにある「広島らしい教育」の「平和教育の目標」項目、「基本的な考え方」には「被爆体験の風化や若い世代を中心とした平和意識の低下、希薄化が懸念される中、人類史上最初の被爆都市であるヒロシマの子どもたちは、被爆の実相等の事実に学びつつ被爆体験の意味を再認識し、それを次世代へ語り継いでいく役割を担っている。（中略）本市においては、こうしたことを踏まえ、子どもたち一人一人に被爆体験を確かに継承し、世界平和の実現に貢献しようとする実践的な態度を育成することを最重要課題と認識し、平和教育の目標の具現化に向け、取組を進めていく」とあります。

５月１８日から、広島でＧ７広島サミットが開かれました。未来を担う子どもたちが、世界恒久平和の実現に向けて行動することができる普遍的価値観を学ぶ機会を「説明できにくいから」という理由で削除した広島市教育委員会の行為は、「世界平和の実現に貢献しようとする実践的な態度を育成することを最重要課題と認識し、」の文言とは矛盾しており、「被爆の実相」を学ぶ機会を自ら放棄している行為と言わざるをえません。

改めて、平和都市を謳う広島市教育委員会のこの度の行為に強く抗議し削除撤回を要請します。

習する際、浪曲でお金を稼いだり、鯉を盗んで母親に食べさせたりすることを理解させるために「場面背景や経緯の補足説明が必要であり時間を要する」、「誤解を与える恐れがある」、「漫画の一部分の引用では実相に迫りにくい」等の課題があげられました。これらの意見は、素材である「はだしのゲン」という作品自体を評価したものではなく、授業で扱う教材への課題を指摘したものであると捉えています。その課題を解決するために、実際の授業では、児童の理解や思考を促すために、場面背景や経緯を補足で説明するなど、教員は様々な支援や努力を行っていると認識しております。

新たに用いることとした素材は、昭和２０年８月５日に撮影された「家族写真」をテーマとして、原爆で自分以外の家族を一瞬で亡くした後、家族写真を決して撮りたがらなかったという被爆者のエピソード等から「家族の絆」について学ばせることができるものであり、補足説明なしで、児童が感情移入しやすいものとなっています。

こうしたことを踏まえて、一定の授業時間内で本来の目標を達成するために、どちらの教材がより使いやすいかという観点から見直し、新たな教材を用いることとしました。

また、現行の高等学校の「ひろしま平和ノート」に掲載している中沢さんからの「戦争は絶対にしてはいけない」「核兵器を絶対になくさなくてはいけない」というメッセージ等は、中沢さんご自身が壮絶な体験をされた被爆者であり、体験の継承のために漫画を描くという発信をしてこられた「継承と発信」のモデルとなりうる人であることから、引き続き掲載することとしています。

小学校においては、「はだしのゲン」から新たな素材へと変更することにより、「はだしのゲン」に触れる機会が少なくなるということを懸念されている方が多くいらっしゃることを踏まえ、例えば、夏休みなど、長期休業中の家庭学習で参考にできるよう、「はだしのゲン」をはじめとする、広島の被爆の実相を知ることができる、いくつかの作品を紹介するなどの工夫について考えているところです。

「ひろしま平和ノート」に掲載している学習内容は、学習指導要領を踏まえつつ、国語科や社会科、道徳科などの各教科等の中で、実施することとしています。そのため、学習に使う教材の開発や検討については、学習指導要領に示された目標や内容、各教科で使用する教材について精通し、それらに専門的な知識を有する大学関係者や教員が行うものであると考えています。

今回の改訂については、令和５年２月８日に公開の教育委員会議で報告をし、その結果を踏まえ、内容を固めました。最終的な決裁は、「ひろしま平和ノート」を含めた「平和教育プログラム」全ての成果物が完成した時点で、教育委員会職務権限規程に基づき令和５年３月末に行いました。

しかしながら、先程述べた公開の教育委員会議で、改訂案の内容を報告した後、特定の作品の掲載が取りやめになるという箇所が反響を呼んだところです。これを振り返ると、公開の場で報告を行ったものの、広く周知する場とならなかったことから、今後、改訂を行う際には、周知の時期や手段等の検討を行いたいと考えています。

小学校３年生の「ひろしま平和ノート」を一部改訂した理由は、これまで述べさせていただいたとおりであり、決して「はだしのゲン」が平和教育にふさわしくない、という判断をしたということではありません。今後、「はだしのゲン」について、御意見をいただいた際には、丁寧な説明をしていきたいと考えています。

今後とも本市教育にご理解とご協力をお願いいたします。

反戦・平和を訴える平和劇（朗読劇）を子どもたちに

劇団「だいこんの花」の9年間

大分県退職現職教職員協議会（大分県退現教）
今井敬子（中津市退現教協）

1、始めに

①　憲法を無視し、戦争に向かう岸田政権

・岸田政権の憲法違反の戦争準備

岸田文雄首相は全く憲法を無視し、安倍・菅を超える独裁政治を進めています。ロシアのウクライナ侵略や北朝鮮のミサイル発射実験、台湾問題などを利用して、敵基地攻撃をする武器をアメリカから爆買いすると言い、軍事費を５年間で４３兆円、５年後には軍事費を倍増する（世界第３位の軍事大国）と閣議決定しました（無責任にも財源は不明確、増税）。

さらに福島の反省もなしに原発の再稼働や新設を行うと言い、福島第一原発汚染水を海洋放出しています。国会を無視し「閣議決定」だけで日本の方針を大きく変え、戦争する国に舵を切ってしまいました。

・闘わない労働組合

これらの戦争の準備を進める危険な政治に対して、労働組合の動きはありません。「連合」は、軍事費倍増にも原発にも反対する動きはありません。「日教組」の反戦・平和に対する取り組みも見えません。年配者や市民運動が行動するしかない状況になりました。憲法を無視して戦争に進む岸田政権に対し、国民挙げての抵抗が必要です。また、国会も大政翼賛会化し、維新、国民民主は憲法改悪賛成です。本当の平和に向けて踏ん張るのは今です。

・５１年目の「大分の平和教育」

８月６日（広島原爆の日）を登校日として平和授業を行う大分県の平和教育が始まって、今年度で５１年経ちました。５月３日「憲法」、８月６日「原爆」、１２月８日「加害」、２月１１日「思想統制」という４結節点は県教委の圧力で実施が危ぶまれる状況になりました。しかし、粘り強く取り組んでいる学校が多くあります。

・今を語らない平和授業

県教委の圧力で平和授業はやりにくくなり、学校現場は自己規制して去年と同じことをやっておけばよいとかビデオを見せればいいとか、力を入れて平和授業をしようという姿が少なくなったようです。そして、内容も７８年前の戦争のことが主で、現在につながる課題を取り上げることは少ないようすです。

② 大分県の退職した教職員の会は 「県退職現職教職員協議会（県退現教）」

・大分県　大分県退職現職教職員協議会（県退現教）は、１９７３年３月県退現教（男子）が結成されました。すでに、退職校長会、退職公務員連盟、婦人教職員退職現職協議会（女性退現協）の組織はありました。その後、１９７８年から支部段階の組織つくりが始まり、

１９８４年に県退現教は再結成しました。　２０１６年６月、県退現教と県女性退現協（現・県退現教女性部）が統合し現在に至っています。

・中津市　下毛郡退職現職教職員協議会（男女）（下毛退現教協）は１９７９年２月に結成されました。２００５年の市町村合併により中津市と下毛郡（４町村）が合併し、中津市退職現職教職員協議会（中津市退現教協）と名前を変えました。　２０１７年６月、中津市退現教協と中津支部女性退現協が統合し現在に至っています。

2、劇団「だいこんの花」の立ち上げから

① 女性退現協の戦後７０年　最後の戦争体験の聞き取りを本に

戦争体験者は高齢化し少なくなってきました。第１次安倍晋三内閣で教育基本法が改悪され、戦争の影が近づいていると感じるようになった戦後６９年の２０１４年、中津支部女性退現協でこれが最後になるかもしれない「戦争体験者の聞き取り」をすることにしました。

１年半かかって７人の聞き取り（１人は家族）を行い、２０１６年７月に戦争体験集「いのちの花」を発行しました。是非とも子どもたちに伝えたいと思い、現職の支部平和教育担当者会議に出席したりして、各学校の学校図書館に置いてもらい平和授業に使ってほしいとお願いしました。

② どうしたら子どもたちに伝わるのか　聞き取りから演劇シナリオに

戦争体験集をつくったものの、子どもたちに読んでもらうだけではなかなか本当の戦争は伝わりにくいと考えました。そこで、現職の時に日本語の教員だった人が、聞き取りをした中から「焼夷弾の下を逃げ回って（佐世保大空襲）」を劇のシナリオに書き換えて（１作目）くれました。それを使って劇団を立ち上げて子どもたちに伝えようと思いました。

③ セリフを覚えられない　でも台本を持つ朗読劇なら

女性退現協の役員を中心として参加者を集め、７人が集まりました。演劇経験がある人は一人もおらず、学校文化祭で子どもたちの劇の指導をするくらいでした。さらにセリフを覚えられないこともわかりました。

女優の日色ともゑさんたちがヒロシマの朗読劇「この子たちの夏」や「夏の雲は忘れない」の公演で全国を回っていました。中津での公演を見たこともあり、台本を持って行う朗読劇だったらなんとかできるのではないかと考えました。また、１０年ほど前に、宮崎市で日教組九州ブロックの平和教育研究会があり、延岡市の退職者の会の「延岡空

襲の朗読劇」を見たことも大きなきっかけとなりました。

④　なかなか声がかからない　　こちらから売り込め

朗読劇団を立ち上げ、女性退現協の総会で旗揚げ公演を行いました。友人を頼って劇が出来る学校を探し、子どもたちに対しての公演が始まりました。音響もつくったものの上手くできず、舞台に立ったままでの読み聞かせのようなものでした。こちらから声をかけてもなかなか公演まで行けませんでした。

始めの頃は劇団の名前もありませんでしたが、立ち上げ１年後の学校の公演で劇団名を尋ねられて、「劇団　だいこんの花」という名前を付けました。「だいこんの花」は全国退女教のシンボルフラワーで、花言葉は「不戦のちかい」です。それで劇団の名前にしました。

退現教協の総会で公演することができ、男性退職者にも劇団の活動を知ってもらうことが出来ました。それで、退職して公民館館長をしている人から「ぜひ老人会で公演してほしい」と声がかかり公演しました。公演後には、公演を見た人たちが自分の戦争体験を話し合い、「絶対に戦争しちゃいかん」と確認しあいました。

こちらから友人などに声をかけて講演を依頼することが続きました。

⑤　退現教協と女性退現協の統合　　男性団員の加入で劇に幅が

２０１７年６月、支部退現教協と支部女性退現協とが統合し、劇団「だいこんの花」は母体を女性退現協から退現教協に移しました。劇団「だいこんの花」を立ち上げてから３年目の年で、この統合をきっかけに男性部員を募集し６人が加入しました。そして新しいシナリオ「沖縄戦ガマの中の出来事」（２作目）をつくり４月から練習を始め、６月の退現教協と女性退現協の統合集会で公演し参加者にアピールしました。

８月６日、１２月８日の「平和を願う日」を中心とした小学校・中学校を始めとして、連合大分の県の平和学習会や、中津地区の大分大学同窓会、小学校の母と女性教職員の会、お寺の女性部学習会、労働金庫中津支店友の会、コミュニティセンターのサロン（老人会）、小学校の地域と一緒に行う文化祭、コープおおいた平和のつどい、退現教協総会等、色々な場所で公演することができました。

⑥　新型コロナに負けず　　新作つくりと　マスク姿でマイク３本を使っての公演

２０２０年に入って、新型コロナが流行し公演が出来なくなり、公演依頼もなくなりました。この間に、新しいシナリオ「はるみのヒロシマ」（３作目）をつくり、２０２０年秋から準備を始めました。そして、２０２１年春から本格的に練習し、８月６日に大幡小学校で公演することができました。

新型コロナになってからは、マスクをつけての公演となりました。２作目からは、段々と演技も取り入れ、スタンドマイク３本を使って声を拾い、音響（効果音）やスライドも入れたものにしていきました。

⑦　音響・照明の工夫　　耳と目からも訴えられるよう

劇の中では声（台詞）だけではなく、感情に訴える効果音（音響）が必要と考え、小学校の効果音のＣＤを借りて作りました。１作目の途中で、学生時代に演劇の裏方で効果音作りをしたことがあるという現職教員がいることを知り、その人にお願いして２作目３作目の効果音をつくってもらいました。

また、パソコンが得意な学校事務職員の退職者に頼んで、パソコンで音響が出来るようにソフトを探してもらいました。CD プレイヤーで行ってきた音響もパソコンで効果的に流せるようになりました。

照明も暗転して赤い電灯で火災を表したり、焚火の燃える火を作ったりして工夫をしました。

⑧　少しずつ公演が広まる　　偶然　新聞記事に

学校での公演活動が、口コミで広がっていき公演依頼が来るようになりました。

昨年８月には大分合同新聞が２回も取り上げてくれて新聞記事となりました。これでまた声がかかるようになりました。

今年度（２０２３年度）は、６月２３日の沖縄慰霊の日に関わって如水小学校、沖代小学校で「沖縄戦ガマのなかの出来事」の公演、７月から８月は、８・６ヒロシマに関わって沖代小学校、中津市退現教協総会学習会、県教組中津支部青年部平和学習会、耶馬渓中学校、コープおおいた平和のつどいで「はるみのヒロシマ」の公演を行うことができました。

3、現在の取り組み

①　団員は全員演劇の経験がない素人集団　観客が理解しやすいように「読むから動くに」

１５人の団員は、誰も演劇経験がありません。それでシナリオから演技、音響までみんなで作っています。練習（立ち稽古）の前と後に必ず全員でミーテイングを行い、意見を出し合ってより良いものに作り上げています。動作、映像、音響などに併せての演技は少しずつ進歩してきていると思います。

②　火曜日の午後を練習日に

原則毎週火曜日の午後１４時から１７時、教育会館大ホールで練習会を持っています。団員は教員不足で学校の講師を頼まれたり、公民館の講座の講師などいろいろな活動をしており、曜日を固定して（火曜日の午後）全員が集まって劇団の練習ができるようにしました。

③　新作の模索

今は「沖縄戦」をメインに「ヒロシマ」「焼夷弾」を組み合わせながら公演をしています。１２月８日の「加害」に対応できるように「中国侵略・加害」のシナリオをつくっており、新作（４作目）に取り組んでいこうと思っています。

④　代役が出来る体制に

平均年齢が７２歳を超え、最高年齢が８６歳の劇団です。新型コロナやインフルエンザの感染者や急な家族入院等、急に公演に出席できなくなる団員も出ました。なんとか公演を中止しないようにと、２人分を１人で演技したり、学校に出ている元団員に頼んだり、組合書記や書記長に出てもらったりして急場をしのいでいます。新たな団員の加入が必要です。

⑤　大切にする公演後の交流会

公演の前に簡単に劇の話をします。「沖縄戦」だと、沖縄戦の歴史や意味、「軍隊は住民を守らない」という沖縄戦の教訓等などをスライドを使って話し、公演に入ります。

公演の後、団員と観客で交流します。感想や質問等を通して平和への思いを伝えていきます。この交流を大切にしています。現職が話しにくいことを話すこともできます。劇の後の１時間、団員が学級に分かれて入って交流した学校もありました。

4、見てくれた人たち（観客）の反応

①　子どもたち　　「沖縄戦」の公演後

「沖縄戦のことは全く知らなかった」という子どもが多くいました。「赤ちゃんが殺されたところは自分の弟が赤ちゃんなので涙がでた」という子どももいました。「ウクライナ戦争をどう考えるのか」とか「日本は本当に中国と戦争するのか」「戦争を止めるために自分たちができることは何か」という質問もありました。子どもたちは本当によく見てくれています。そして、よい感想を出してくれます。

また、私たちの劇を見たことのある子どもたちが「長崎に行った修学旅行の報告を劇にして発表したい」と担任に訴え、「永井隆物語」を劇にして「８・６平和を願う日」で全校児童や保護者に発表した学校も出てきました。

②　大人たち

・老人会　「焼夷弾」の公演後

「兄が戦死した。白木の箱には石ころが入っていた。」「絶対に戦争してはいかん」「家の近くに爆弾が落とされ、子どもとばあちゃんが亡くなった。」「空の高い所を大きな音を響かせてＢ２９が飛んでいた。爆弾は落とさんかった。」「空襲警報が鳴ると、いつも防空壕に逃げていた」「山に爆弾が落とされて山火事になった」等、今までほとんど話したことがない自身の戦争体験を話し出し、口々に平和のありがたさを訴えました。

・教職員　「沖縄戦」の公演後

「自分もはじめて沖縄戦のことを知った」という若い男性教員もいました。公演を沖縄戦学習の導入や、まとめに使ったり、全校集会（平和集会）での発表に劇の事を話したり、また、子どもたちに感想文を書かせた学校もたくさんありました。

・労働組合　「沖縄戦」の公演後

昨年１１月の九州地区の書記職員協議会の学習会では「赤ん坊を殺すまえに躊躇する日本兵。本当にそのようなことがあったのか。命令に従うことが兵隊じゃないのか」「私の名前は明子、殺された赤ちゃんと同じ名前だ。涙が出た」「近くに基地がつくられる。戦争が起こることが怖い」等、交流ができたことはうれしいことでした。

5、今後のビジョン

① 高齢化と劇団の維持

一年一年団員の高齢化が進みます。６０歳代の（若い）団員の加入が必要となっています。

② 心に訴える演劇に

どうしたら心に響く演技が出来るのか工夫を重ねています。公演のビデオを全員で見て、観客の目で演技や脚本の改善を進めています。（声の大きさ、トーン、話し方、出入り、顔や目の動作、話さない人の動き、音響、照明）

③ 新しいシナリオつくり

加害体験の新しいシナリオや、少人数で短編の平和劇つくりなど、今後のビジョンはたくさんあります。

6、終わりに

① 「本当に今は戦前の空気に似てきた」

戦争体験の聞き取りを行った人たちや高齢者の観客が口々に「本当に今は戦前の空気に似てきた」「怖い」「本当の戦争はこんなもんじゃない」と言います。戦後日本の歴史を１８０度変える岸田軍拡政権に抗議していく必要があります。全く戦争の反省もなく、すでに日本国憲法を変えてしまったようにふるまう政治家のために、私たちが「戦争で殺し・殺される」のは絶対に許されません。

② 非武装中立の憲法９条改悪を許さず、教え子を再び戦場に送らないために

「戦争法」がつくられ、軍事費倍増、敵基地攻撃等で「年寄りが戦争を始め、若者が死ぬ」という構図がまたもやつくられようとしています。最後の砦である平和憲法を改悪させてはいけません。

③ いろいろな手段を使って「戦争絶対反対」を

平和劇の取り組みは本当にささいな取り組みです。しかし、未来を生きる子どもたちの命を守ることこそ私たちがしなければならないことです。いろいろな手段を使って子どもたちとともに、本当の平和（非武装中立の平和）を考え行動していきたいと思っています。今こそ「教え子を再び戦場に送るな」を実践していきましょう。

「幸せとは、当たり前が当たり前にあることです」

新聞記事

大分合同新聞

「劇団だいこんの花」の活動を伝える大分合同新聞

2022年8月22日

同新聞　2022年(令和4年)8月22日　月曜日

戦争伝える朗読劇

中津の元教職員らの劇団「だいこんの花」

小中学生向けに上演「繰り返してはいけぬ」

今津中の平和授業で「はるみのヒロシマ」を上演する元教職員らの劇団「だいこんの花」メンバー＝中津市植野

【中津】中津市内の元教職員らでつくる劇団「だいこんの花」（新川京子代表）が、朗読劇を通じて戦時中の出来事を子どもたちに伝えている。戦後70年の節目に旗揚げ。戦争体験者の証言や文献を基に台本を作り、小中学校で上演している。「戦争ほど愚かで残酷なものはない。二度と繰り返してはいけない」と訴え続ける。

結成を呼びかけたのは元小学校教諭の今井敏子さん（70）。2015年の戦後70年に向けて戦争体験の聞き取り活動をする中、「戦時中の記憶や体験者の思いは、演劇であれば小中学生に伝わりやすいのではないか」と考えた。元同僚たちを誘い、同年に7人で旗揚げ公演をした。これまで長崎県佐世保市での空襲や太平洋戦争末期の沖縄戦などを題材にした台本を制作した。中津市内外の小中学校などで約20回上演してきた。

現在のメンバーは60～80代が中心の14人。今月6日は、今津中（同市植野）の平和授業で「はるみのヒロシマ」を上演した。広島市に投下された原子爆弾で、主人公の女子児童が家族を失うまでのストーリー。「熱い、熱い。どこに行っても火が回っている」と被爆者が苦しむ場面などを熱演し、当時の悲惨な情景を想像させた。

生徒からは、「戦争は絶対にしてはならない」といった感想が聞かれた。

今井さんの夫で劇団のリーダー的存在の久夫さん（71）は「核兵器化の影響で身近に戦時を生きたお年寄りがいない子ども多い。体験者も年々減り、戦争の記憶が遠のいていることに危機感は強い。

今井さんは「教え子を再び戦場に送ってはならないという先輩教職員の思いを聞いて育った。今後も新たな話をまとめるなど、戦争をさまざまな側面から伝えていきたい」と話している。

（植原佑輔）

今井敏子さん　今井久夫さん

大分合同新聞　2022年(令和4年)8月7日　日曜日

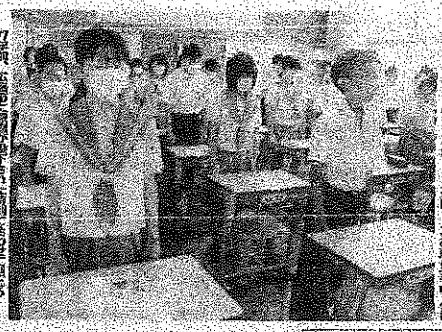
8・6平和授業で公演する「劇団だいこんの花」

2022年8月7日　大分合同新聞

平和授業 思い新た

県内全国に先駆け50年前から

小中学生、不戦誓う



72年前、広島市に投下された原爆にちなみ平和授業を行う中津市の今津中＝6日午前、中津市植野

広島市に原子爆弾が投下されて77年となる6日、県内の多くの小中学校で平和授業があった。戦後50年の節目を合わせて実施し、戦争の悲惨さを学び取り組みは50年前、全国に先駆け大分で始まった。子どもたちは祈りの思いを新たにした。

中津市植野の今津中（93人）は第1、2学年の生徒18人、教諭1人が参加した。この後、近くの今津コミュニティーセンターで「平和授業3日」の募金を呼びかけた。

来賓として参加した国際教育推進協議会（武力による解決はいけないという考え方、平和を願う気持ち）を持ってほしい」と呼びかけた。

退職した教諭らを中心につくる劇団「だいこんの花」が朗読劇「はるみのヒロシマ」を上演した。主人公が学童疎開している間に、自宅のある広島市に原爆を落とされ、家族の命が奪われるストーリー。今年はコーラスサークル「コスモス」は反戦の思いが込められた歌を歌った。

3年の相良雅音さん（14）は「戦争は人間だけでなく、戦争は平和な生活を脅かす」

劇団の「はるみのヒロシマ」を演じた劇団「だいこんの花」のメンバー。原爆が投下され、熱い、熱い、どこに行っても火が回っている」と苦しむ被爆者を演じた＝6日午前、中津市植野

ってしまうもので、絶対にあってはならないことだと感じた」と話った。

教育委員会によると、平和授業は戦争から27年目に当たる1972年度、県内の小中学校5・45校のうち47・4校で実施。翌年の個別テーマとして実施すると共に、県外で受入する学校が増えたという。

今年は3日が土曜だったことから6日間の授業を、新型コロナウイルスの感染拡大を受けて中止した学校もあった。

（国東花織）

大分県退現教だより 創刊号 2021年 8月15日(日)(2)

来年は「平和教育50年」

大分県教組が全国に先がけて平和教育を始めたのは、1972年(昭和47年)でした。

8月6日、広島原爆の日を登校日にして、原爆の授業を行うことを大会決定し、全県下で取り組みました。

当日が日曜日であったことも影響してか、校長、地教委、PTA等が反対して子どもたちの登校を阻止したり、職務命令を出したりしたところもありました。

しかし、好意的なマスコミの報道などもあり、2～3年目にはすべての学校で8・6平和教育を行うことができました。

来年は、大分の平和教育が半世紀・50年を迎えます。

だいこんの花の公演後、子どもたちの感想を聞く団員

平和教育を 教育の原点として

今年も県下の各学校で工夫した8・6平和授業が行われました。

しかし、この間、現場では平和教育がやりにくくなってきています。

今こそ憲法・教育基本法の原点である、「平和と民主主義」「人権と平和」を、教育活動の原点として取り組んでいきましょう。

子どもたちと共に平和を！ 8・6 劇団「だいこんの花」公演（中津）

中津市退現教協に「劇団だいこんの花」という朗読劇団（団員14人）があります。

今年の8・6は中津市の大幡小学校5年生（116人）に、広島原爆の朗読劇「はるみのヒロシマ」を上演し、子どもたちと一緒に「戦争と平和」について考えました。

この「劇団・だいこんの花」は2015年に中津市女性退現協で結成し、反戦平和に関する劇（空襲体験、沖縄戦）を続け、5年前退現教協と統合した時に母体を退現教協に移して活動しています。

退職者も現職者と一緒に平和教育を進めていきましょう。

大分県退現教だより

発行所

〒870-0051
大分市大字下郡
496の38 教育会館
大分県退職教職員
組織員協議会
電話 097-556-5617

② 大分県退現教協だより

大分県退現教だより 第4号 2022年 9月 2日(金)(1)

軍隊は住民を守らない！

「劇団だいこんの花」の公演

「ええい 殺せ！」泣く赤ちゃんを撃つ日本兵

総会に先立ち、県退現教の研修として、「劇団だいこんの花」の「沖縄戦ガマの中の出来事」の公演を行いました。

「劇団だいこんの花」は中津市退現教協の劇団（団員14人）です。小中学校の子どもたちを中心に反戦平和の朗読劇を行っていて今年で結成7年目です。

今年は、思いもよらなかったウクライナ戦争が始まり、沖縄復帰50年の節目の年です。それで「軍隊は住民を守らない」という沖縄戦の実態を劇にした公演でした。

参加者は「皆さんの声がウクライナの空の下で苦しんでいる母親、子ども、老人、そして人々と重なってきました。同じ間違いが未だに続いている」「赤ちゃんが泣くというそんな当たり前の権利さえ奪われることが戦争」「記憶」を伝えるという朗読劇は大変意義深いものだ」等々。劇の感想を出してくれました。

（1953年10月５日第三種郵便物認可）　発行定日　１日・10日・20日　2022年６月10日

大分教育新聞 No.2543

発行所
大分市大字下郡496の38　教育会館内
大分県教職員組合
情宣部　電話556－5617　定価　８円
（組合員の購読料は組合費の中に含む）

「退現」のつながりをより強くしよう！

～大分県退現教第6回定期総会の開催～

６月１日に３年ぶりに県退現教の第６回定期総会が開催された。その前段に退現教の研修を兼ねて、中津支部の退職した教職員で結成した劇団「だいこんの花」による朗読劇が行われた。セリフ一つひとつに込められた反戦平和の思いが見る人の心を動かし、沖縄戦におけるガマ（防空壕）の中での悲惨な出来事を通して、「兵士が守るのは、国であって国民でない」ことが伝わる素晴らしい朗読劇だった。

定期総会では、太田孝治会長が、「私が今一番心配するのがウクライナへのロシアの侵略、それから新型コロナウイルス感染症の感染拡大である。そして一番気になるのが憲法を変えようとする動きが急速に早まっていることである。『教え子を再び戦場に送るな！』のスローガンのもと憲法を、特に９条を変えさせてはいけない。大分県教組が『８・６』平和学習を始めて50周年。私たちの平和を守るためにも、７月の参議院議員選挙に、退現がいっしょになって闘っていかなければならない」と挨拶した。その後、活発な議論が行われ、2021年度経過報告と2022年度運動方針が承認された。

県教組は、県退現教ともに、よりよい学校現場のために取り組んでいく。そして、７月の参議院選挙については、全国比例区日政連候補予定者「古賀ちかげ」、大分選挙区「足立信也」の勝利に向けて、退現一致の取り組みをすすめていく。

劇団「だいこんの花」公演記録　　２０２３・９

年　月・日	場所	対象	演目	公演回数
2015				
６・２７	中津下毛教育会館大ホール	中津女性退現協総会	（焼夷弾）	①
８・　６	小楠小学校多目的ホール	小楠小学校１・２年生	（焼夷弾）	②
2016				
４・２１	柳ヶ浦小学校多目的ホール	柳ヶ浦小学校１・２・３年生	（焼夷弾）	③
８・　６	三保小学校体育館	三保小学校全校児童	（焼夷弾）	④
８・２７	レストハウス洞門	中津市退現教協総会	（焼夷弾）	⑤
１０・２５	耶馬渓町戸原公民館	戸原老人会	（焼夷弾）	⑥
１２・　８	秣小学校体育館	秣小学校全校児童	（焼夷弾）	⑦
2017				
１２・　８	秣小学校体育館	全校平和集会で話・公演なし		
2018				
７・１４	中津下毛教育会館大ホール	中津市退現教協総会（統合総会）	（沖縄戦）	⑧
８・　６	和田小学校多目的ホール	和田小学校全校児童	（沖縄戦）	⑨
９・　１	ソレイユ大ホール	連合大分「平和行動２０１８イン大分」	（沖縄戦）	⑩
１０・１３	南部公民館大ホール	大分大学同窓会	（沖縄戦）	⑪
１０・１６	沖代公民館大ホール	沖代小学校　母と女性教職員の会	（沖縄戦）	⑫
１１・　８	沖代小学校多目的ホール	沖代小学校３年生	（沖縄戦）	⑬
１２・　７	秣小学校体育館	秣小学校全校児童	（沖縄戦）	⑭
2019				
６・２８	鶴居小学校体育館	鶴居小学校６年生公演後クラスで交流	（沖縄戦）	⑮
７・　１	光楽寺講堂	光楽寺婦人部学習会	（焼夷弾）	⑯
７・２７	ソレイユ大ホール	連合大分「平和行動２０１９イン大分」	（焼夷弾）	⑰
９・　３	三光中学校体育館	三光中学校全校生徒	（沖縄戦）	⑱
１０・１１	労働金庫中津支店	労金友の会総会	（沖縄戦）	⑲
１０・１５	如水コミセン大ホール	上如水ふれあいサロン（老人会）	（沖縄戦）	⑳
2020				
８・　６	北部小学校体育館	北部小学校６年生	（沖縄戦）	㉑

2021

８・　６	大幡小学校多目的ホール	大幡小学校５年生	（ヒロシマ）	㉒
１１・２８	津民小学校体育館	津民小学校文化祭（全校＋地域）	（沖縄戦）	㉓
１２・　６	北部小学校体育館	北部小学校６年生	（沖縄戦）	㉔
１２・　８	今津小学校体育館	今津小学校３～６年生	（沖縄戦）	㉕

2022

６・　１	大分県教育会館	県退現教定期総会	（沖縄戦）	㉖
６・１４	沖代小学校多目的ホール	沖代小学校６年生	（沖縄戦）	㉗
８・　６	今津コミセン大ホール	今津中学校全校生徒	（ヒロシマ）	㉘
１１・２２	ホルトホール大分	日教組九州地区書記職員協議会	（沖縄戦）	㉙
１２・　３	中津教育福祉会館	中津平和運動センター１２・８平和学習会	（沖縄戦）	㉚
１２・１３	鶴居小学校体育館	鶴居小学校５、６年	（沖縄戦）	㉛

2023

２・１０	沖代小学校多目的ホール	沖代小学校５年生	（沖縄戦）	㉜
２・１４	真坂小学校体育館	真坂小学校３、４、５、６年生	（沖縄戦）	㉝
６・２０	如水小学校３・４年生	如水小学校体育館	（沖縄戦）	㉞
６・２７	沖代小学校５年生	沖代小学校多目的ホール	（沖縄戦）	㉟
７・１９	沖代小学校６年生	沖代小学校体育館	（ヒロシマ）	㊱
７・２２	中津市退現教協総会	中津下毛教育会館大ホール	（ヒロシマ）	㊲
７・２５	教組中津支部青年部平和教育学習会	中津下毛教育会館	（ヒロシマ）	㊳
８・　６	耶馬渓中学校全校生徒	耶馬渓中学校多目的ホール	（ヒロシマ）	㊴
８・　９	津民小学校全校児童	津民小学校音楽室　（ヒロシマ）	台風のため中止	
８・１９	コープおおいた平和のつどい	ホルトホール大分小ホール	（ヒロシマ）	㊵

※　公演演目

１作目	「焼夷弾の下を逃げ回って　佐世保大空襲」	→（焼夷弾）
２作目	「沖縄戦　ガマの中の出来事」	→（沖縄戦）
３作目	「はるみのヒロシマ」	→（ヒロシマ）

朗読劇　沖縄戦　ガマの中の出来事

▼「時代が戦前の空気と似てきた」と言われている現在です。ロシアのウクライナ侵略戦争がいまだに続いています。日本政府は軍事費倍増、敵基地攻撃、憲法9条の改悪等、駆け足で戦争体制に近づこうとしています。戦争はすべての人を不幸にします。私たちは「戦争絶対反対」「平和憲法を守れ」「教え子を再び戦場に送るな」と活動を続けてきました。

▼劇団「だいこんの花」は、中津市退職現職教職員協議会（中津退現教協）の朗読劇団です。7年前（2015年）、中津支部女性退現協は戦争を経験した人たちから「戦争体験」の聞き取りをして本にまとめました。その中からシナリオをつくり、朗読劇団をつくって公演活動を始めました。1作目は「焼夷弾の下を逃げ回って」（佐世保空襲体験）です。

　中津市退現教協と中津支部女性退現協の統合（2018年）に伴い、劇団の母体を中津市退現教協に移し男性団員も加入しました。そして2作目には沖縄戦の真実を伝えたいと「沖縄戦ガマの中の出来事」、3作目は広島原爆を題材にした「はるみのヒロシマ」をつくりました。新型コロナの中ですが、小・中学校を中心に、母女の会、老人会、公民館、退職者の会、労働組合等で公演を続けてきています。

▼本日の公演「沖縄戦　ガマの中の出来事」は「軍隊は決して住民を守らない」という沖縄戦の教訓を朗読劇にしたものです。沖縄戦から77年、沖縄の日本復帰から50年。今だに「沖縄は本土の捨て石」と言われ続けています。

▼「朗読劇」というのは、普通の劇とは違い、見ている人が想像してもらう劇です。想像力、イメージ力を最大限に発揮してご覧ください。

あらすじ

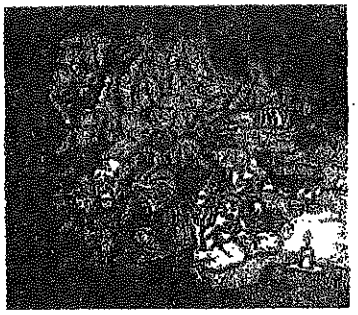
　このお話は、戦争の終わる１９４５年、沖縄での出来事です。

　３月、戦争の最中でしたが、おじいとおばあは、いつもの年と同じように畑でサトウキビの苗を植えていました。そこに米軍の戦闘機が飛んできました。

　戦闘機からビラがまかれ、近くにその１枚が落ちました。ビラには「降伏せよ。４月１日から上陸作戦を行う。」と書かれてありました。

　４月になりビラの予告通り米軍が沖縄に上陸してきました。住民たちは逃げ迷い、ガマ（自然壕）の中に逃げ込みました。赤ん坊を抱えた若い母親も逃げ込んできました。

　そこに日本兵が入ってきました。赤ん坊は泣き続けます。すると…



キャスト

おじい	…	友松　正裕
おばあ	…	小林　悦子
喜屋武・兵	…	坂田　博司
村長・小隊長	…	津水久仁隆
ゆみこ	…	岡野　公子
まさる	…	山口　鈴子
仲里	…	梅津　和彦
知恵１	…	中村多衣子
知恵２	…	村上　美帝
劇ガイド・若い母親	…	今井　敬子
ナレーター	…	新川　京子
音響	…	今井　久夫

中津市退職現職教職員協議会　劇団　だいこんの花

〒871-0152　中津市加来1540　中津下毛教育会館内　☎0979-26-2145

日退教組織活動交流集会レポート

２０２３年１０月１３日

神奈川高教組シニア運動　　早川芳夫

「安倍晋三元首相国葬閣議決定取り消し並びに予算執行差し止め違憲確認並びに損害賠償請求事件」横浜訴訟について

Ⅰ．経過

２０２２年７月８日 安倍晋三元首相銃撃事件

７月１２日　安倍元首相の葬儀・増上寺・個人の葬儀に自衛隊儀仗隊が参加

７月１３日　岸田首相安倍元首相の「国葬」実施を決定

７月１４日　岸田首相記者会見で表明、その際「内閣法制局とも協議した」と嘘をつく

７月２２日　安倍元首相の国葬を９月２７日実施を閣議決定

７月２１日　東京等の市民団体、個人が、東京地裁に安倍元首相の国葬差し止め、予算執行差し止めの仮処分命令を東京地裁に申し立てる。

８月２日　　東京地裁却下。

８月１２日　神奈川県等の市民団体、個人が横浜地裁に国葬差し止め、予算執行差し止めの仮処分命令を申し立てる。

＊（さいたま地裁、大阪地裁でも申し立てが行われる）

＊高裁、最高裁に申し立てが行われるが、いずれの申し立ても最高裁に棄却される。（１２月１９日）

８月１２日：横浜地裁に「国葬違憲確認並びに損害賠償請求訴訟（略）」を提訴

原告４５名（シニア運動会員７名、他の日退職教会員５名を含む）

９月９日　東京地裁の東京の市民団体、個人が行った提訴は、弁論も行われないまま即日棄却（原告約２００名）。

＊さいたま地裁、大阪地裁でも同様の内容で提訴が行われる。

９月２７日　安倍元首相国葬儀実施（日本武道館）

遺骨を自宅から市ヶ谷の防衛省を経由して武道館へ。武道館では、約 1200 名の自衛官が制服で出迎え、１２発の弔砲を打ち鳴らした。

Ⅱ．横浜地裁の経過

１１月７日　第１回公判・口頭弁論

原告：早川他１名が口頭陳述（弁論原稿別紙）

2023 年２月１５日　第２回公判・口頭弁論

被告：国が反論提出、原告：早川他１名が文書で陳述書提出、

証人２名（憲法学者：小林節氏、木村草太氏）の申請

５月１１日　第３回公判：証人２名の却下・結審

７月１２日　第４回公判・判決：判決理由は国の主張そのもの

Ⅲ．横浜地裁判決

１．主文：閣議決定の無効確認請求、国葬儀の予算執行の無効確認、国葬儀が憲法に違反することの確認請求はいずれも棄却する。その余の請求を棄却する。訴訟費用は原告の負担とする。

２．争点

① 閣議決定の無効確認

（原告）⇒　国葬実施の閣議決定は、原告らが思想・良心の自由を享受する固有の人格的利益を侵害するものであるから、国民の権利・義務を制限するものであり、行政処分と同等の効力を有する。内閣府設置法により、国葬を執り行えるとした根拠はない。

（判決）⇒　閣議決定は、訴訟の対象となる行政処分ではない。原告らに特定の思想または信仰を制約したり弔意を強制するものでないから、原告らに思想・良心の自由・信教の自由等を制限するものではない。

② 予算執行の無効確認

（原告）⇒　思想・良心の自由、信教の自由等に反する財務会計を伴う内閣の行為に違法確認を求められる。

（判決）⇒①で述べたとおり、思想・信条等を制限しない国費の支出する国の行為に、国民の権利・義務を形成し、範囲を確定する法的効果はない。（地方自治法の住民監査の仕組みがない）行政処分に該当しないから、無効確認は不適法である。

③ 国葬は憲法違反

（原告）⇒法的根拠がなく、不法に税金が使われた国葬への参加を強いられ、弔意を強制されたことは、憲法第１４条（法の下の平等）、憲法１９条（思想・良心の自由）、憲法２１条１項（宗教行為・儀式に参加を強制されない）に反する。

（判決）⇒訴訟は具体的な権利・義務の法律上の争いに限定、この法律関係の存否には該当しないため不適法である。（憲法裁判所が日本にはない）

④ 国家賠償を求める

（原告）⇒安倍元首相は国葬に相応しい人物ではない。そんな人物に、国民の税金が一方的に使われた。そして、岸田首相は、国全体で弔意を示す儀式と国民に説明した。これは、同調圧力を国民に強いて、弔意を表すことが強制されることとなり、精神的苦痛を味あわされた。そのことにより、国家賠償法上の対象となる。国は、精神的損害への補償を行うべきである。

（判決）⇒ 個々の国民に、弔意を示すこと、喪に服すること、儀式に参加することを実際に事実上にも強制はしていない。国費で賄われても、原告らの人格権や人格的利益を侵害していない。国家賠償に値しない。

⑤ 判決文の結語

⇒　本件閣議決定の無効確認請求、予算執行の無効確認、本件国葬儀の違憲確認請求は不適法であり、棄却する。その余の請求は理由がなく棄却する。

Ⅳ．東京高裁に控訴

７月２６日：東京高裁に控訴状提出　・・・現在、東京高裁からの連絡待ち

＊さいたま地裁は公判継続中

＊大阪高裁は、原告死亡により中断中

２０２２年１１月７日横浜地裁での口頭弁論内容

令和４年（行ウ）第４８号

安倍晋三元首相国葬閣議決定取り消し並びに予算執行差し止め違憲確認並びに損害賠償請求事件

原告　〇〇　〇　　早川芳夫

被告　国

陳述書

２０２２（令和４）年１１月７日

早川　芳夫

私は、早川芳夫と申します。神奈川県立高校で、４３年間社会科教員として勤務しておりました。現在は、少年院で中学生に社会科を教えています。

神奈川県立高校では、卒業式・入学式において国旗・国歌の掲揚・斉唱が強制され、式の中では国歌斉唱時に起立することが職務命令で強制されています。

神奈川以外でも全国で同様の指導が行われており、東京や大阪などの一部自治体では、不起立を理由に戒告以上の分限処分が行われています。また、教員が実際に唱っているかどうかの調査すら行われた職場もありました。

このように、教育現場では、職務命令による国旗・国歌へ敬意を示すことが強制されています。そして、自身の思想信条を守るためにそれを拒否してきた教職員には、屈辱的な指導や、分限処分が行われています。

７月２２日の安倍元首相の葬儀の時、神奈川県内のいくつかの自治体及び学校では、半旗・弔旗の掲揚依頼がなされました。このことは、政治家の私的な葬儀を、学校という公的な場が利用されたのです。

安倍元首相の国葬においては、国民の反対が６０％を超える状況の中で、教育現場まで弔旗・半旗の掲揚要請が行われたところは少なかったようです。ただ、国の機関や安倍元首相の選挙区のある山口県では、各出先機関まで弔旗・半旗が掲揚され、中でも山口県では、県立高校に職務命令による強制が行われたと報道されています。

教育現場では、弔旗や半旗が掲揚されれば、必ず子どもたちからその理由を質問されます。その時には、教員はきちんと説明することが求められます。子どもたちには、国民と同じように国葬に賛成する者も反対する者もいます。教員はどう答えれば良いのでしょう。子どもたちは、教員や教育現場には敏感です。そのことによって、子どもたちや、教職員に対して思想信条の自由を侵害する恐れがあるのです。

また、全国の学校現場で、教員が国葬について子どもたちから質問されたことでしょう。国葬が行われたこと自体が、国民や児童・生徒たちの思想・信条の自由を侵害した可能性すらあるのです。

岸田首相は、７月８日に安倍元首相が銃撃されたわずか５日後の７月１３日に「国葬」の実施を決め、７月２２日には「国葬」を９月２７日に行うことを閣議決定しました。その理由として以下の三点を挙げています。①首相の在任期間が歴代最長であること。②経

済と外交に大きな功績があったこと。③国内外から哀悼・追悼が寄せられていること。と言う三点です。

しかし、在任期間を除いては客観性のないものです。岸田首相は、「今後在任期間が最長となる首相が現れれば必ず国葬をするのか」との問いにはそれを否定しています。在任期間も、国葬を実施する理由とはならないものです。つまり、内閣が基準無しに国葬実施を決めたのです。

大日本帝国憲法下で国葬の実施を定めた「国葬令」は、日本国憲法施行の７か月後に「失効」しました。「国葬令」そのものが、国民主権、思想信条の自由など、憲法の精神にそぐわないと判断されたからに他なりません。

また、岸田首相は、「内閣府設置法」に基づいての国の儀式だとしていますが、そもそも法律の裏付けのない儀式を、内閣が勝手に決定して実施することは許されないはずです。

また、時間的余裕はあったのに、国権の最高機関である国会でまったく議論を行わず、内閣だけで決定したことは、独裁的な政治を行っているとの批判を免れないものです。

そして、葬儀を国家が主催して行うことで、国民全体にその対象たる安倍元首相に弔意を強制するだけでなく、その功績まで称えさせるという意味を持たせるのです。

それは、国民主権の侵害と言わなければなりません。

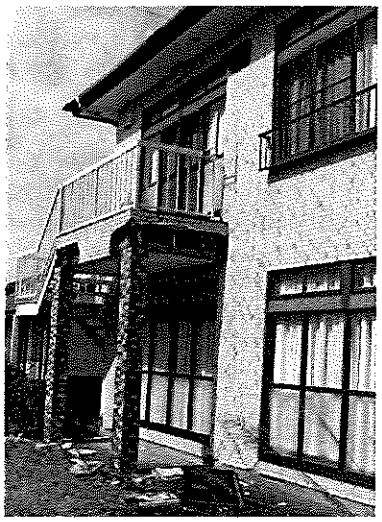
私達は、安倍元首相の国葬の実施は憲法に違反し、内閣による閣議決定だけで国葬を実施した、その違法性は免れないものと考えます。そして、１２億円以上と言われる費用の支出は全て国費によってなされており、その費用の支出の違法性も免れません。国民にそのような損害を与えたことは許されないものであり、私達主権者に損害賠償を支払うべきものと確信します。

以上です。

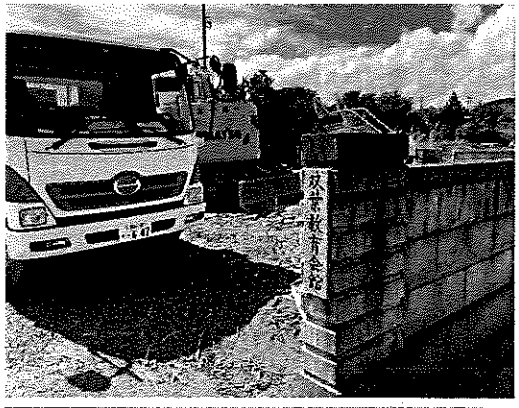
４００号間近！　会報発行のとりくみ

福島県退職教職員協議会　双葉支部
事務局長　柴口正武

２０１１年１０月。双葉地方教育会館への一次立ち入り。



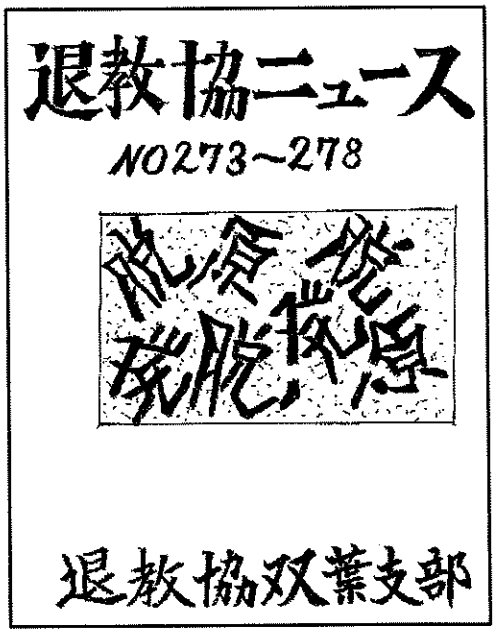
向かって右は、当時の福島県教組委員長の竹中さん（現県退教協事務局長）。左が柴口。



２０２２年９月。双葉地方教育会館解体。

集える場所がなくなった。

はじめに



２０２１年度末をもって、浪江町のなみえ創成中学校で定年退職を迎えた。退職教職員協議会（以下「退教協」）に加入し、双葉支部の事務局長を引き継ぐことになった。引き継がれたファイルには右のものが綴られていた。おそらく亡くなられた元支部長の花房さんの手書きによるものだろう。双葉支部会報「退教協ニュース」（以下「会報」）の２７３号～２７８号をまとめたものの表紙の原稿である。

双葉支部の誇り　会報の発行

退教協双葉支部では、会報を月１回のペースで発行している。元支部長の花房さんが、１９９２年７月の第１回支部総会からスタートさせ、今年１０月１日の発行で３９４号となった。２００７年には２００号、そして２０１５年には３００号を発行し、来年度には４００号を発行することになる。

震災前は、双葉地方教育会館で印刷をし、まとめて各地区の「世話人」に送り、その世話人が地区内の会員に手配りをしながら会報発行を続けてきた。原稿依頼は、花房さん、次の支部長の今村さんなどが中心となって、電話や直接出向いて行っていたようである。私が、教職員組合の専従をしていた時期、双葉教育会館を双葉支部の書記局として業務にあたっていた。教育会館の近くに住んでいた花房さんは、会館の管理も引き受けていただいており、ほぼ毎日会館に顔を出していた。そこで、会報発行の様子を見させていただき、そのパワーには驚かされたものである。

２０１１年３月１１日に、東日本大震災、それにともなう東電第一原発事故により、会員は県内外に散り散りに避難をすることになった。会津若松市に避難した花房さんは、震災後１年後には、会報発行の再開を決意した。震災前の事務局的な場所であった双葉地方教育会館は立ち入りすらできない状況だったが、福島県退教協の支援のもとで発行再開を実現した。当時の県の事務局長の住谷さんには、原稿の集約、編集、発送等、大変お世話になった。支部の事務局長を花房先生が担っていたが、それを明治輝子さん、松本昭子さんとつないで、会報発行を支部の力で継続する体制をつくってきた。この３９５号という「途方もない」号数の支部会報は、退教協双葉支部の誇りである。

避難先での双葉支部会員

右の表は、震災当時の町村ごとの（現在の）会員数（全部で８９名）である。当時は会員数も多かったはずである。震災前は近くにたくさんの仲間がいた。

本来の住所

浪江	23
双葉	8
大熊	15
富岡	26
川内	1
楢葉	14
広野	2

現在の居住地

県内市町村	福島市	12
	本宮市	2
	郡山市	10
	田村市	1
	白河市	1
	会津若松市	1
	相馬市	4
	南相馬市	2
	いわき市	23
	桑折町	1
	会津坂下町	1
	浪江町	3
	富岡町	2
	川内村	2
	楢葉町	9
	広野町	3
県外	青森県	1
	宮城県	1
	茨城県	2
	栃木県	1
	千葉県	2
	埼玉県	2
	東京都	1
	富山県	1
	宮崎県	1

※ 現在の会員は89名。その会員は、震災前は右上の表の町村に住んでいた。現在は、上表のとおり、県内外に住まいを移している。

しかし今は違う。次の表のとおり、福島県内の各地に、そして県外にあっては青森から宮崎まで広がる。避難指示が解除され、少しずつ地元に戻ってくる会員も増えてきたが、現時点では１９人にとどまる。

震災から１２年が過ぎ、避難先に新たな住居を決めて新しい生活をしてはいるが、本来の自宅に戻れず、親しく付き合ってきた仲間と、または親戚と会うことが難しい状況に変わりはない。そして、この１３年で当然のように年齢を重ねた。一人で移動することもままならない会員も多い。物理的に距離が離れた状況では、会いに行くことも難しい。

県退教協の支援を得ながら、震災の年に開催した支部定期総会には、県本部役員等も含めて１２名が参加した。翌年は２０名に増えたものの、震災前に双葉地方教育会館で、いわゆる「桜のトンネル」が満開の土曜日に開催していた頃に比べればあまりにも少数である。

右の表は参加者名簿であるが、歴代支部長をはじめ、歴代県教組中央執行委員長が名を連ねる。一般の会員の参加もそれなりに見られた。そして、コロナ禍の中、総会自体も実施できないまま今にいたる。

支部総会参加者

2011年度　2011. 9. 29

No.	氏名
1	今村　好
2	菅野　良久
3	花房　高次
4	杉本　征男
5	[illegible]
6	[illegible]
7	[illegible]
8	会田　長栄
9	清野　和彦
10	[illegible]
11	[illegible]
12	住谷　圭造

2012年度　2012. 5. 25

No.	氏名
1	花房　高次
2	菅野　良久
3	杉本　征男
4	[illegible]
5	[illegible]
6	[illegible]
7	[illegible]
8	[illegible]
9	[illegible]
10	[illegible]
11	[illegible]
12	[illegible]
13	[illegible]
14	[illegible]
15	[illegible]
16	[illegible]
17	[illegible]
18	会田　長栄
19	清野　和彦
20	住谷　圭造

※ 震災後の1回目、2回目の支部定期総会の参加者名簿。網掛けは支部や県の役員以外の方。

右の写真は、２０１５年の総会の写真である。前列、向かって右から３人目が花房さんである。赤い帽子をかぶっているのが私の父であり、翌年亡くなった。写真の中には、花房さんや父の他にも、亡くなった方が複数いる。

※ 2015年の総会の写真。

双葉支部での会報の意義

近くになかまがいない。

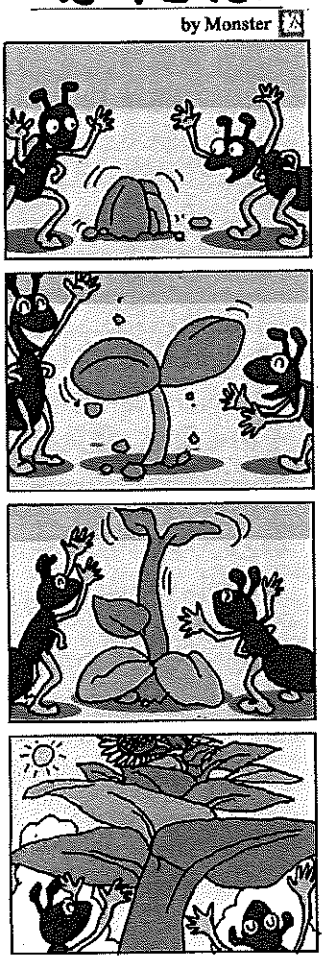
自分で自由に移動することもままならない。

施設に入ったままのなかまがいる。

そして、避難先で亡くなっていくなかまがいる。

さらにコロナ禍で総会もできない。開催しても出席できない。

そんな私たちをつなぐものが、会報である。双葉支部にとっての会報は、双葉支部の絆そのものといえる。その継続は、花房さんをはじめとする先輩方に対する恩返しでもある。



前を向いて

会報の原稿は会員からの投稿である。震災前のなつかしい思い出だったり、避難先での生活だったりする。その投稿からは前を向いて生きていく会員の姿が感じられる。

福島県にあって双葉地方は、小さく不便な地域だった。その双葉地方は、今、さまざまな形で生まれ変わろうとしている。自宅に戻らない住民の中には、その変化に少なからず違和感を持っている人もいる。それでも、ふるさとの復興を前向きに受け止めながら、自分の生活をつくっていこうと決意している。そして、退教協双葉支部の今後の活動も、会報発行を柱に前向きに考えて進んでいきたい。

※ 会報には、挿し絵と四コマ漫画をかかせてもらっている。

【資料】最新号 №394　　２０２３年１０月　１日

退職教職員協議会双葉支部会員のみなさま

福島県退職教職員協議会
双葉支部　　事務局

退教協双葉支部「退教協ニュース№394号」の送付にあたって

今年の夏は記録的な猛暑となりました。会員のみなさま方も、暑さ対策、体調管理には苦慮なされたことと思います。さらに、県内で初めて観測されたという「線状降水帯」の発生により、いわき市をはじめとする浜通りには大きな水害も発生した年でした。被害にあわれた方には、心よりお見舞い申し上げます。猛暑にしても豪雨にしても、それが毎年のこととなれば、これまで言われてきた「異常気象」は、もはや「通常気象」というしかありません。

その主な原因は「地球温暖化」。「地球温暖化」に対して「脱炭素」が叫ばれ、その「脱炭素」に乗るような形で「原発推進政策回帰」が進められようとしています。岸田首相をはじめとする原発推進勢力は、今も続く原発災害を見て見ぬふりをしているとしか思えません。原発はクリーンエネルギーではありません。私たちにとっては「もっとも汚い」エネルギーです。「汚染水（政府やマスコミが言う「処理水」）」海洋放出をできるだけ早く止め、「脱炭素」とともに「脱原発」の声を上げ続けていきましょう。

訃報

安倍清明さんが、８月にお亡くなりになりました。先日、息子さんより事務局の方へ連絡がありました。原発事故後、富山県に避難をしていらっしゃいました。すでにご葬儀等は済んではおりますが、退教協双葉支部として今回の会報と一緒に香典をお届けいたします。安倍清明さんは、県教組双葉支部の最後の「専従」書記長として活動し、組合活動を引っ張りながら教職員全体の労働環境の改善に尽力してくださいました。これまで本当にお世話になりました。ありがとうございました。

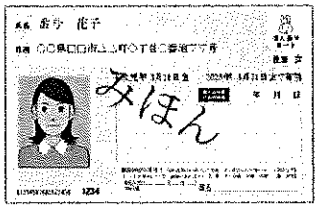
変わる制度 -その6-

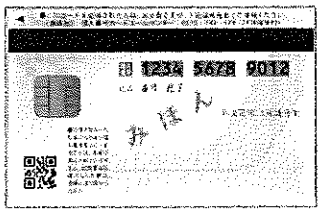
保険証がなくなるの!?

マイナンバーカードと一体化!

今、政府が進めているのが、保険証とマイナンバーカードの一体化です。これにより現在の保険証は廃止になります（来年秋頃）。

このことについてはたくさんの批判がありますが、政府はいまだに撤回はしていません。しかし、マイナンバーカードがなくても保険診療を受けることができるようにすると厚生労働省は約束しているので、現在カードを持っていなくても心配する必要はありません。まだ取得されていないとしても、あわてて取得する必要はありません。

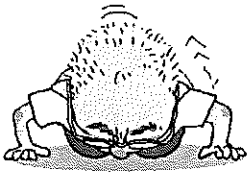




そもそもマイナンバーカードって？

２０１５年（平成２７年）に、１２桁の個人番号が通知されました。それが「マイナンバー」です。その目的は、役場等の行政機関の間での情報のやり取りがスムーズになり、各種の手続きが簡略化されるというものでした。さらに「マイナンバーカード」を取得することによって、確かにさまざまなメリットはあります。「本人確認」「コンビニ等での各種証明書の取得」「オンラインでの行政手続き」などです。カードには「氏名」「住所」「生年月日」「性別」「顔写真」「マイナンバー」「電子証明書」「住民票コード」が記録されています。カードの取得については、ご家族とよく話し合いをしてください。

原稿をお待ちしています



近況報告、または昔の思い出、さらには現職時代の写真など、提供をよろしくお願いします。短歌や俳句なども大歓迎です。

○　住所等の変更及び会報の原稿は、下記の連絡先までお願いいたします。

○　連絡先　　（事務局長）柴口正武　宅

〒９７６－００３６　相馬市馬場野字寺内１７５－５

※　電話は　　０９０－２６０４－８９４１

※　ファックスは　　０２４－５２２－７７５１

（弘済会福島支部／柴口勤務先）

※　電子メールは　　shibaguchi0211@gmail.com

双葉支部

２０２３年１０月　１日　　第３９４号

退教協ニュース

合唱団に入団して　－シリーズ「第九への道」（その１）－

いわき市（大熊町）久保田亮次

平成５年度(1993)浪江中５年目。３年副担任、５～８組数学。

①　５／５　次女夫婦に同乗、岩瀬牧場。婿殿とビールで乾杯。
　→〔意識不明〕→岩瀬病院（１泊）

②　８／１０　楢葉町・父方の叔父の告別式。兄たちとビール。
　→〔意識不明〕→県立大野病院に緊急入院。

③　８／１２　カテーテル検査。→〔診断〕「心室細動狭心症」
　心臓専門の主治医、鈴木栄先生の助言で２年を残し退職を決意（教職38年)。

平成６年(1994) ６月１６日、双葉郡で混声で唯一の浪江混声合唱団に入団。毎週（木）ＰＭ７～９時。主な団員は次の通り。

〔団長・バスパートリーダー〕飯田玲夫（自営業)。

〔副団長・テナーパートリーダー〕志賀雄一（小高工高電気科長、いわき交響楽団バイオリン奏者)。

〔副団長〕前田道子（自営業の妻)。

〔ソプラノパートリーダー〕伊集院律子。

〔アルトパートリーダー〕矢沢直子。

〔指導者〕添田みつえ先生。

〔ピアノ伴奏者〕半谷玲子先生・江畑まなみ先生。

【主な活動内容】

①　定期演奏会の開催（全演奏曲目マスターした段階で開催)

②　浪江町芸文協主催の芸能祭への出演

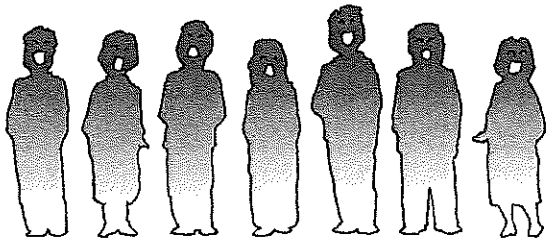
③　郡コーラス交歓会への出演（毎年持ち回り）

④（東電主催）「一万人コンサート」出演（毎年４月）

平成７年(1995) ４月。会場は日本武道館、国技館。出演は（発電地）双葉郡、新潟県柏崎市、（消費地）関東地区。演目は「ヤマトタケル」。演奏は新日本フィル。出演者には、松本幸四郎さん、テナー歌手の錦織健さんなど。司会は木下容子さん（民放ＴＶアナウンサー）。舞台装置、演奏ぶり、大合唱に、初体験のことで感激した。関東地区の方と合唱のことについて情報交換。役立つことが多かった。次回は「かぐや姫伝説」。

⑤　親睦旅行。

平成６年は箱根だったか。富士屋ホテル泊。朝食前のひととき、ムードメーカの高野秀雄さんが副団長の前田道子さんを「ミチ子妃殿下」と発し、周囲の方々の注目をあびた一件は、おかしさをこらえた懐かしい思い出である。



（事務局）

久保田さんより８回分にわたる原稿が届きました。今後届けられた原稿をはさみながら、シリーズ「第九への道」として順に掲載していく予定です。次回は、「第九への道（その２）」をお届けいたします。

地域活動

by Monster